

科学研究費補助金基盤研究 C

「子ども時代の『心に残る』読書に関する実証的研究:読書体験の
形成要素と長期的効果」(19K12722) 成果報告会報告書



子ども時代の 「心に残る読書体験」を考える

第1部:発表・報告

「日本における子どもの読書の状況の変化－2000年以降を中心に」……p.1
汐崎順子(慶應義塾大学文学部非常勤講師)

「インタビューから子ども時代の『心に残る読書体験』に近づく試み」……p.12
須賀千絵(実践女子大学文学部)

「ミュージアム体験の長期記憶に関する研究の展開」……………p.20
湯浅万紀子(北海道大学総合博物館)

第2部:パネルディスカッション……………p.32

「心に残る体験を研究する意義・方法・成果」
パネリスト:須賀千絵、汐崎順子、湯浅万紀子

科研費
KAKENHI

発行
2024.04.29

成果報告会開催日時, 会場
日時:2024年3月9日(土)
時間:13:30~16:00
場所:ワテラスコモンホール
〒101-0063
東京都千代田区神田淡路町2丁目101番地

第1部：発表・報告

「日本における子どもの読書の状況の変化

－2000年以降を中心に

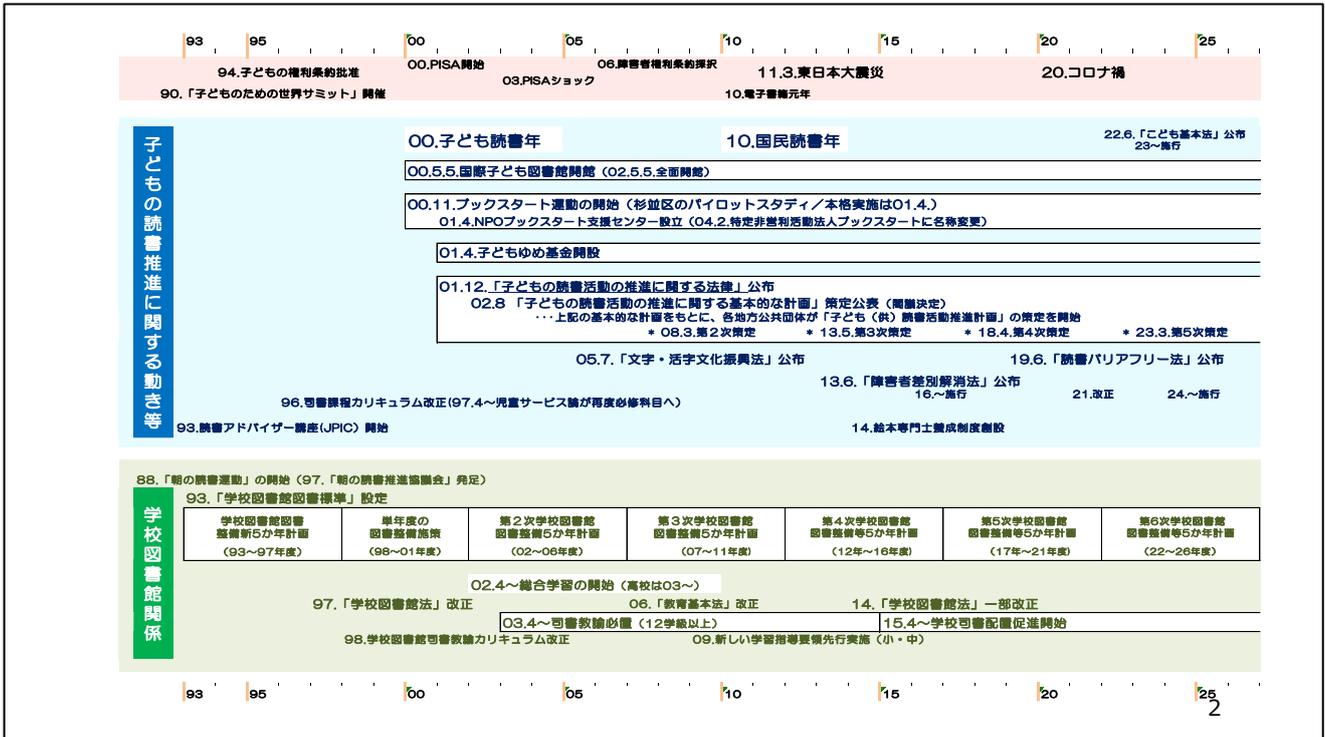
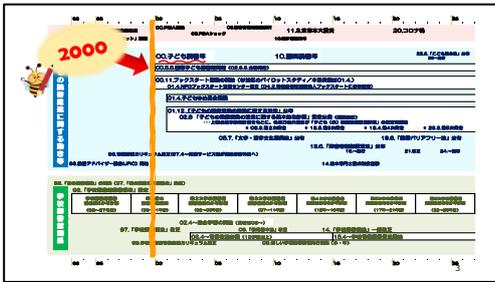
汐崎順子（慶應義塾大学文学部非常勤講師）



皆さま、こんにちは。汐崎です。

昨日は雪だったんですが、きょうはお天気もよくて、たくさんお越しいただき、どうもありがとうございます。「子ども時代の心に残る読書体験を考える」というテーマにさまざまご興味をお持ちの方においでいただき、満足できる発表ができるといいなと思っているのですが、実は私は、湯浅先生のご発表をすごく楽しみにしています。

私は、慶應義塾大学などで非常勤講師をしまして、児童サービスとか子どもの本について、研究をしています。今日私は、研究の成果発表そのものではないのですが、「日本における子どもの読書の状況の変化」というテーマで発表いたします。それでサブタイトルを「2000年以降を中心に」、としたんですが、実は2000年から語ることはちょっとできないな、ということがあります。こちらのスライドが実はすごく細かくて、目にはつらいと思うんですけど、配布資料のほうでは少し大きくコピーをしてもらっています。



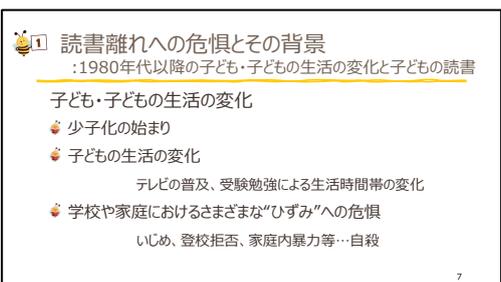
2000年が子ども読書年で、ここからやはり、大きく子どもの読書環境が変わったと思いますし、国を挙げて子どもの読書に取り組む姿勢が明確にされてきているんですけど、もちろんこの2000年以前にも、さまざまな綿々とした取り組みがあります。ですから、2000年が一つのエポックとは思いますが、その前の80年代ぐらいから、読書環境の変化の動きが見えるところから話をし、そして2000年以降については、少し厚めに話をさせていただこうと思っています。

こちらのスライドの上の部分が子どもの読書に関する動きで、下は特に学校とか学校図書館に関するものです。教育の現場で考えると、この動きはとても大きくて、様々な取り組みが1990年代から始まっています。そこで、学校に関するものをまとめてみました。

今日の発表は、三つのパート、どちらかというと1がかなり大部なものになると思いますが、1が“子どもの読書環境変化とその背景”、2が“子どもの読書の「今」”、そして3は私たちの研究で次の須賀が発表するものにつなげたいと思いついて、“読書環境の変化とインタビュー対象者”としました。たくさんの方にインタビューをお願いしてご協力いただきましたので、ここでは、それぞれがどういう時代に位置づけられるのか、というのを少し俯瞰してみようと思っております。

まず、“子どもの読書環境変化とその背景”です。読書離れ、学力低下、そして図書館離れへの危惧が始まった、ということから話させていただきますが、それについては1980年代、特に後半から子どもの生活、子ども自身、そして子どもの読書が変わってきたという捉え方です。これについてはよくご存じの方もいらして「またか」、みたいな感じかもしれませんが、ちょっとまとめという形でお聞きください。1980年代、特に後半は少子化が始まった時代ですね。戦後に第一次ベビーブーム、第二次ベビーブームというのがある、出生数のピークは1973年でした。以降は減少の一途をたどっています。ついこの前もニュースで「日本の子どもがこんなに少なくなりました、大変ですよ」、なんていう報道があったんですが、子どもが少なくなっています。

そして子どもの生活も、テレビが普及して子どもがその画面にくぎづけになったり、受験勉強等々によって子どもの生活時間帯が変わってきた。1980年代の中ほどからは、特に学校や家庭におけるさまざまな“はずみ”への危惧というものも、あちこちで言われるようになりました。例えば、いじめです



とか、登校拒否ですとか、今は DV と言ってますけど、家庭内暴力、そして嘆かわしいことに、若年層の自殺についてもかなり注目が集まり、ニュースになったりと、もちろんその前にもあったとは思いますが、そういうことが問題視される時代です。

日本もそういう状況の中で、もちろんいろいろな意味で子どもの生活の変化を問題視していたんですけど、1989年…1990年になる1年前に、“子どもの権利条約”…“児童の権利に関する条約”が国連で採択されて、全ての子どもに子どもの権利を、ということが謳われました。つまり子どもたちに対するさまざまな問題が、日本だけではなくて世界的な、国際的なレベルでいろいろ論じられるようになった、ということです。世界の子ども全てが権利を持つ主体であることを約束し、弱者である子どもの状況の改善を目指そうということで、1989年に採択されました。

そこでは子どもたちがただかわいがられるとか、権利を享受するだけではなくて、子ども自身も発信者で権利を持つ主体なんだ、ということが広く言われ、世界で最も広く受け入れられた人権条約として知られています。日本では2020年に子ども基本法というのもできましたけれど、こちらの権利条約の内容が盛り込まれた形です。日本は子どもの権利条約を1994年に批准し、現在196の国と地域が締結している、とユニセフは発表しています¹⁾。

そして図書館の観点で言いますと、子どもの図書館利用の変化が始まりました。もちろん子どもの数が減りますから、子どもの貸出冊数は減っていくし、登録者数も減っていくわけです。草の根の活動である文庫も、1980年がピークで、とてもたくさんの…4,000を超える文庫が1980年の初頭にはあった、と言われているんですけど、子どもの数が減っていくのと並行して文庫も減少します。こちらのスライドには「児童サービスの内容の見直し・多様化」とあります。これ以前は子どもの数が多く、児童書の貸し出しも多く、「児童サービスは図書館発展のカギ」みたいなことが言われていたんです。

じゃあ子どもが少なくなったら、サービスもしなくていい、ではなくて、もう少しきめ細かなサービスを考えていきましょう、という視点が生まれた。このあたりから乳幼児サービスであるとか、ヤングアダルトサービスであるとか、病院にいる子どもたちにサービスをサービスというものを考えていかなければいけないよね、と質的な面での変化も起きます。

 **読書離れへの危惧とその背景**
:1980年代以降の子ども・子どもの生活の変化と子どもの読書

「子どもの権利条約」の採択 1989 (国連)

- 🔥 **すべての子どもに、子どもの権利を**
世界の子ども全てが、権利を持つ主体であることを約束
弱者である子どもたちの状況の改善を目指す
- 🔥 **あらたな「子ども観」の共有と実行へ**
世界で最も広く受け入れられた人権条約
(日本は1994年に批准/現在196の国と地域が締結)

8

 **読書離れへの危惧とその背景**
:1980年代以降の子ども・子どもの生活・子どもの読書

- 🔥 **図書館利用の変化**
子どもの登録者数、貸出冊数の減少
～児童サービスの内容の見直し・多様化
- 🔥 **「読書離れ」への危惧**
「不読率」(学校読書調査)への注目
～学校図書館の整備・充実の動き

9

そして読書離れに対する危機感も、やはり 80 年代、90 年代ぐらいから始まっているんですね。それだけで測るのはどうかとも思うんですけど、「不読率」が注目されるようになった。これは全国 SLA（学校図書館協議会）が、毎年調査をしていて、11 月に『学校図書館』の雑誌にも出ますけれど、1 カ月のうちに 1 冊も本を読まなかった子どもが年々増えてるよね、と。不読率は下がるんじゃなくて、上がるほうが問題なんですけれど。これも一つの契機に、学校図書館の整備とか充実をしていかなければいけない、という意識が明らかになってきたと思います。



参考に過去 31 年分の不読率の推移を全国 SLA のホームページから拾わせていただきました²⁾。不読率は 1997 年が中学生、高校生では最高でした。小学生の不読率の最高は、少し後（1998 年）になります。この「不読率が高い」ということを皆さんがどのように考えるかなんですが、中学生、高校生は 2 人に 1 人以上が 1 カ月、調査期間の 5 月の 1 カ月に 1 冊も本を読んでいないということで、子ども読書年などは、不読率の増加への取り組みをなんとかしなきゃいけない、とか、1988 年から始まった「朝の一斉読書」もこの不読率の低下を目指して頑張ろうと。そしてこれ以降、不読率が少しずつ減ってきているのは確かだと思います。

1 読書離れへの危惧とその背景
:1980年代以降の子ども・子どもの生活・子どもの読書

- 図書館利用の変化
 - 子どもの登録者数、貸出冊数の減少
 - ～児童サービスの内容の見直し・多様化
- 「読書離れ」への危惧
 - 「不読率」(学校読書調査)への注目
 - ～学校図書館の整備・充実の動き

さらに! 2003 PISA ショック

読解力・学力低下への危機感増大

さらに 2003 年には PISA ショックが…皆さんもよくご存じだと思っんですけど、ありました。PISA は、OECD が 2000 年から始めて 3 年に 1 回のスパンで続けてきた 15 歳の読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシー、この三つの分野の習得度を国際的に調査する試験ですけれど、そこで日本の子どもの順位が下がった。その結果を見て、子どもたちの読解力はどうなる、となった。そこから読書をなんとかしなければいけない、という動きが加速度的になったと思います。

官民一体となった
子どもの読書への取り組み
「子ども読書年」とその後

そして“官民一体となった子どもの読書への取り組み”ということで、こちらのスライドから 2000 年以降の話になります。“「子ども読書年」とその後”…2000 年が「子ども読書年」ですね。2000 年ってちょっと前のことだったな、なんて思っていたんですけど、大学生を教えていると、2000 年よりも後に生まれた子たちが今、大学生で、ジェネレーションギャップを感じるなど。

私なんかは図書館員だったとき、「子ども読書年」ってなに? 「子どもの読書活動の推進に関する法律」ってなに? という感じだったんですが、この 2000 年に衆院参院、両院の決

1 官民一体となった子どもの読書への取り組み
「子ども読書年」とその後

- 「子ども読書年」(2000年)
“国を挙げて、子どもたちの読書活動を支援する施策を集中的かつ総合的に講ずる”(子ども読書年に関する決議案)
- 国際子ども図書館開館(2000年5月5日:子どもの日)
ひろく世界の子ども文化に貢献しよう
国立の図書館をめざす

子ども読書年に関する決議案(第一回印刷部、決議案三号) 決議案HP41
https://www.shugoin.go.jp/internet/itdb/gian/itdb/gian/honbu/ketsugian/914517003.htm(2024.3.6参照) 13

議で”国を挙げて子どもたちの読書活動を支援する施策を集中的、かつ総合的に講ずる”³⁾、という子ども読書年に関する決議がなされました。そして2000年の5月の5日…子どもの日ですね。この日に、子どもの本の館を開きましょ、広く世界の子ども文化に貢献し得る国立の図書館を目指ましょと、国際子ども図書館が開館しました。実際のところ、全面開館したのは2年後の2002年の5月5日だったんですけれど。国際子ども図書館を私たちはILCL(International Library of Children’s Literature)とも呼んでいます、その活動も20年以上たって、かなり定着してきたと思います。

1 官民一体となった子どもの読書への取り組み
「子ども読書年」とその後

- 「子どもの読書活動の推進に関する法律」(2001.12)
(基本理念) 子ども(おおむね十八歳以下の者をいう。以下同じ。)の読書活動は、子どもが、言葉を読み、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものに、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであることにかんがみ、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない。
- 「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」(2002.8)
～各自治体は「子どもの読書活動の推進に関する施策についての計画」の策定へ

14

そして、さきほども言いましたけれど、2001年の12月には「子どもの読書活動の推進に関する法律」が、公布されました。法律では子どもを18歳以下として、彼らの読書活動の推進を国だけではなくて、さまざまな人たちが、みんなで頑張ろう、積極的に子どもの環境の整備が推進されなければいけない、と謳われました。そして、この法律に基づいて、翌年には「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」…どうして法律もこの計画も、名前がこんなに長いんでしょうね、私たちは「基本計画」と、短く呼んだりしていますけれど。その第1次が策定されました。そして、各地方自治体、これは県のレベルと市区町村のレベルがありますけれど、「子どもの読書活動の推進に関する施策」(「子ども読書活動推進計画」)の策定がここから始まります。

1 官民一体となった子どもの読書への取り組み
「子ども読書年」とその後

- 「子どもの読書活動の推進に関する法律」(2001.12)
(基本理念) 子ども(おおむね十八歳以下の者をいう。以下同じ。)の読書活動は、子どもが、言葉を読み、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものに、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであることにかんがみ、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない。
- 「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」(2002.8)
～各自治体は「子どもの読書活動の推進に関する施策についての計画」の策定へ

2006年度末: 都道府県は策定終了
2021年度末: 市93.9%、町村74.4% (2002.8)
2023.5 第5次

自治体の子ども読書活動推進計画の策定率が増加しています。文字サイズが小さい場合は
https://www.hinet.go.jp/tyo/honbu/youdou/hinet/01044.html(2024.3.6参照) 15

この「子どもの読書活動の推進に関する施策」(「子ども読書活動推進計画」)の策定は義務ではないので、まだ策定率は100パーセントには至っていません。けれども、2006年度末に都道府県では全て、策定は終了しました。2021年度末の数字で言うと、新しい数字が示ししできなくて申し訳ないんですが、市では93.9パーセント、町村74.4パーセントが策定終了となっています⁴⁾。またこれは一回、策定すれば終わりというものではなくて、5年ぐらいのスパンで見直す形ですから、早いところではもう第4次と5次とかを策定しています。

でも実は、一方で策定していない自治体もある。そして中身もいろいろなので、きちんと見なければいけないと思います。子どもの読書だけではなくて、市民全体の読書を考える方向にシフトましょ、ということもある。たとえば横浜市では、市民の読書活動の推進計画に変更されました。それぞれ違っているところはあると思います。「基本計画」のほ

1 官民一体となった子どもの読書への取り組み
「子ども読書年」とその後

📖 ブックスタート

「子ども読書年推進会議」で英国の活動が紹介（2000）され、同推進会議内にブックスタート室が発足。2001年～本格実施
「絵本を仲立ちとする親子のコミュニケーションの醸成」が目的
実施自治体（市区町村）：1,106 / 1,741（2024.2.29現在）

🏛️ 国立青少年教育振興機構の取り組み・事業

子どもゆめ基金 2001～

絵本専門士養成講座 2014～

全国の実施状況 NPOブックスタートHPより数値転載
<https://www.bookstart.or.jp/covers/gau/>（2024.3.6参照）

16

うは去年の3月に第5次が発表になりました。そこでは電子書籍の活用が結構、明確に盛り込まれたりもしています。

そしてブックスタート…これは国が、というよりも現在はNPOのブックスタートが主体になっていますけれど、もともとは…元祖というか最初に始まったのはイギリスです。それが「子ども読書年推進会議」で紹介されて、この推進会議室内にブックスタート室が発足して、2001年から日本で始まりました。実際はパイロットスタディーの形で、杉並区で2000年に先行して行われていたんですけど、2001年から北海道の恵庭はじめいくつかの自治体で本格実施されました。

これは0歳児と保護者を対象にする活動です。皆さんもご存じですけど、0歳は本は読めないですよ、ブックスタートでは赤ちゃんに絵本の読み聞かせをしますけれど。授業で学生に説明するときも、「ブックスタート」と言っても、「本を読め」という活動じゃないよ、気をつけてねって話なんです。これは本を仲立ちに親子の豊かな時間を持ちましょう、親子のコミュニケーションの醸成の道具…道具って言い方は好きじゃないんですけど、子どもに言葉がけをたくさんしてくださいね。本にはたくさん言葉がありますよ、ということで始まったものですよ、と。ブックスタートは広く自治体で受け入れられて、2024年の2月の29日現在、これはNPOのホームページで調べましたけど、全国1,741ある市区町村の中で1,106が実施しています⁵⁾。

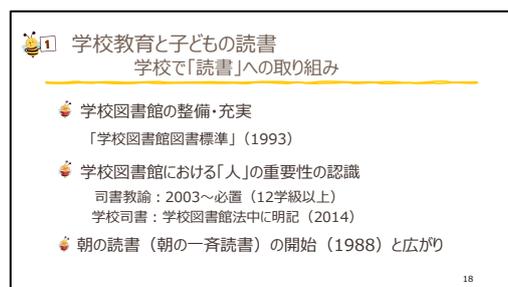
ブックスタートは保健センターや図書館で0歳児の保護者に絵本を渡して、お子さんに読んであげてくださいねって薦める活動で、実施のためにはお金が必要です。それぞれ自治体のお財布の状況もありますよね。実はこちらのスライドには、最初1月末の数字を入れていたんですけど、情報が更新されて、2月29日の数字では1減っていました。1月末は1,107だったんです。是非、続けてほしいなと思うんですけど、それぞれの事情があるかと思います。この事業も義務ではありませんが、かなりの自治体が実施しています。

私も絵本はすごく好きですし、もちろん絵本には子どもの心に響くとか本質的なものがある。それはそれで大事なんですけど、その先も考えていく必要がすごくあると思っています。絵本で終わるんじゃないくて、そこを入り口に活字の世界に入って、さまざまな情報を手に入れなければいけないと思うんです。だから読書、本格的な活字の世界に入るような手だてがもっとほしいなと。例えば茅野市（長野県）みたい

に、0歳児と保護者に渡すファーストブックの事業に加えて、小学校に上がるときにセカンドブックをあげましょうという活動をしている自治体もある。そういう活動をもっとやっていかなければいけないし、絵本を手渡す小さい子どもじゃない、ヤングアダルトなどは本当に問題だと思うんですね。長い間の課題なんです。このヤングアダルトサービスについての視野も、もっと広がっていかねばならないと思っています。

次に学校での読書の取り組みについてお話をしますが、学校はまた大きな動きがあると思います。読書というと読解力、学力というような形にはなりますから。スライドの“学校図書館の整備、充実”…これは1993年に学校図書館図書標準ができ、それをもとに整備が進んでいます。それから、“学校図書館における「人」の重要性の認識”の、司書教諭と学校司書。こちらをご存じの方がとても多いので、さくっといきますけれど、学校図書館法ができて以来、なかなか設置されなかった、必置にならなかった司書教諭が2003年によく必置になりました。学校司書も2014年に学校図書館法が改正されて明記されたりしています。朝の読書…朝の一斉読書が、さきほども言いましたけど、こちらは1988年から始まりました。「朝読」と呼んでいますけれど、こちらは小学校、中学校中心だと思うんですけど、かなり広がって、それが子どもの不読率の改善にかなり貢献しているかなと。

そして“子どもの読書の「今」”ですね。2020年にはコロナ禍が始まりました。それまでも、もちろん電子化は進んでいたんですけど、ここで一気に進みました。電子媒体でなければ本を読めない時期もあって、子どもの読書も大きく変化しました。「電流協」と呼んでいますけれど、電子出版制作・流通協議会が3カ月おきぐらいに電子図書館導入館の数を発表してくださっています⁶⁾。2020年以降、政府がお金を出してくれることもあったんですが、電子図書館の導入館は急増しています。そしてGIGAスクールコース構想での1人1台端末も実は前倒しで進みました。子どもたちはもう、1人1台端末を持って学習をしています。コロナ禍の中での遠隔学習の流れもありましたけれど、学習形態の大きな変化があった、読書の変化があった。そして出版社も子ども向けの読書の素材を「読み放題パック」など、1学級の生徒みんなが読めるよ、というサービスを開始している。さっきも言いましたけれど、第5次の「基本計画」にも電子書籍の活用をしましょう、と



2 紙 & 電子 ハイブリッドの時代へ
コロナ禍以降の急速な電子化と子どもの読書

コロナ化による急速な電子化

- 電子図書館導入館の急増（公立図書館）
93自治体/90電子図書館（2020.4.1）
→534自治体/426電子図書館（2024.1.1）
- GIGAスクール構想の前倒しと普及
生徒一人ひとりに一台の端末
学習形態の変化>読書の変化>学校向け電子書籍サービスの開始
- 「デジタルは当たり前」の子どもたち
スマホ等デジタルデバイスを使いこなす子どもと「読書」

電子図書館「電子書籍サービス」導入記録(2024年01月01日)、電子図書館「公立図書館中心」の取組
https://aeb5.ar.jp/ElectronicLibraryIntroductionRecord.html(2024.3.6参照)

第5次基本計画
(2023.5)中に
「電子書籍の活用」

21

読み取る読書
& 楽しむ読書

今、子どもの読書に
なにを求めているのか

22

2 読み取る読書 & 楽しむ読書
今、子どもの読書になにを求めているのか？

論理国語：論理的活動へのシフトの提言
学力/読解力の低下への危惧>PISAショックの影響
教科書を読めない・理解できない子どもたち
→文章の意味と意図を迅速かつ正確に読み取る力を養う

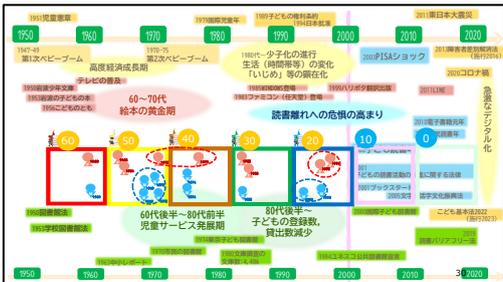
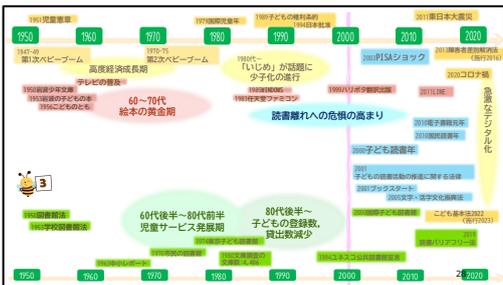
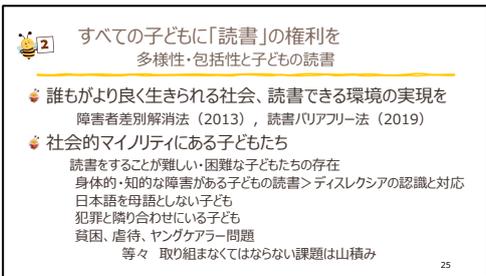
- 文学国語：楽しむ読書、感情を動かす読書の位置づけは？
両輪で進めるべき読書への取り組み
- 読書の効果・成果・影響をどうやって評価するのか？

23

いう内容が盛り込まれた。今までは明示化されていなかった電子書籍を取り入れた読書については、やはりこの2020年以降の大きな変化を受けて、だと思っんですね。

今の子どもたちにとって、本当にデジタルは当たり前ですよ、スマホなりタブレットなりを使いこなして。私なんかスマホだと、メールを打つのもSNSをするのも、片手でポチポチとやっていますけども、若い人は両手でバシバシ打っていますから。当たり前になりました。スマホなどのデジタルデバイスを使っている子どもたち、デジタルネイティブの子どもたちの読書の形もやはり変わっていると思っんですね。そんな中、新井紀子さんの『AI vs 教科書が読めない子どもたち』⁷⁾という本が話題になりました。読み取る読書、楽しむ読書、両方が本当は大切なんですけれど、特に読み取る読書…教科書を読めない、例えば取扱説明書の情報をきちんと読み取れない子どもがいる。何が書いてあるのか分からないという子どもたちにとって、生きていくためにスキルとしてとても重要だろうということで、論理国語が重視されるようになった。いわば読解力の低下への危惧です。文章の意味と意図を迅速かつ正確に読み取る力を養おうと。今はやはり学力とか読解力とかだと偏りがちではあるんですけれど、一方で心を動かし楽しむ読書、感情を動かす読書というものも大切だから、本当は両輪で回っていかなければいけないんです、バランスよく。朝の読書も楽しむ読書に入ると思っんですけれど、そういうことも考えていかなければならないと思っます。

そして“読書の効果、成果、影響をどうやって評価するのか”…今日、須賀が発表することは、こちらに関わってくると思っます。たくさん読んだとか、読解力、例えば漢字が読めるようになったとか、そういう教育的な視点からの評価はもちろん一つの指標としては大切なんですけれど、じゃあ楽しむ読書、感情を動かす読書、心を動かす読書、読書は自分にとってどうなんだろうと。子どもたちの感情の動きは質的なものだから、なかなか見ることができないですよ。もともとは須賀との共同研究も、その評価が難しいよねと、例えば「何冊、読みました」とか「1カ月に1冊も本を読んでいません」とか、そういう数字も大切だけど、そうじゃないベクトルでの評価をしたい。別の評価で、読書ってどうなんだろう、子ども時代の読書ってどういう意味があるのか、どんな価値づけができるんだろう、って考えたことが研究の出発点になったと思っます。



*上の2枚のスライドについては、拡大したものを本発表報告の最後 (p.11) に追加記載

“すべての子どもに「読書」の権利を”。ちょっと時間がおしてますので、急ぎます。今は読書への取り組みも本当に多様化しています。障害のある子ども、あるいは読書から距離がある子ども…例えば 1980 年代から問題視されるようになっていじめですとか、そういうものも、もちろんありますが、ディスレクシアであるとか、犯罪と隣り合わせにいる子どもとか、あとヤングケアラー…自分が子どもでありながら親の面倒も見なければいけない子どもが読書する機会はどこにあるのかを考えなくてはならない、ということです。今は、障害者差別解消法とか読書バリアフリー法もありますけれど、大きな塊で子どもを見るのではなくて、さまざまな状況にある子どもに対して図書館のきめ細かいサービスがあるべきです。子どもの読書について、例えばディスレクシアの子どもにはマルチメディアデージーが有効であるとか、そういうことをもっと認識していく必要もあります。そういう考え方で子どもの読書に向き合っていかなければならない、と思います。

ここが本当に最後で、研究につながる話になります。最初にお伝えしたスライドをさらにもう少し前の時代に伸ばして、こんな図を作ってみました。

研究のためにインタビューをお願いした方は 20 代から 60 代までで、それぞれ生まれた年が違うんですね。そうすると、子ども時代の読書環境はそれぞれ違ってくるわけです。もちろん共有しているものもあるけれど、例えば 2000 年以降に生まれると、電子化が影響するなど、いろいろありますよね。

こちらのスライドでは 1950 年代までもう少し遡って関係することを拾ってみました。例えば 60 年代から 70 年代は「絵本の黄金期」であるとか、先ほど言いましたけれど、いじめが話題になって少子化が進行していくのは 1980 年代の半ばからとか。そういうものをもう少しビジュアルにまとめたものなんです。この 1960 年代後半から 80 年代は、児童サービスが発展して行って、さっきも言いましたけど、「児童サービスは図書館発展のカギ」なんていわれたりした時代です。そんなものを色分けしています。

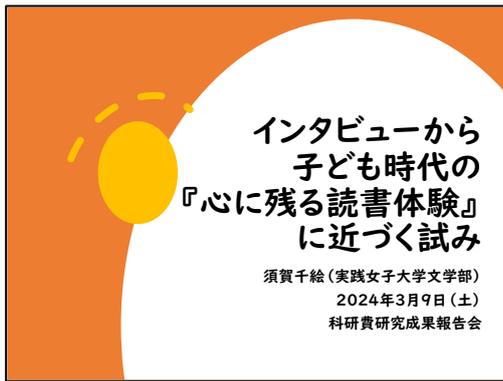
ここにインタビューの方々を重ねてみるとこんな感じなんです。60 代の方が生まれたのは第二次ベビーブームの前とか。○で囲ってあるのは、グループインタビューをしましたので、そのグループです。一番大きな塊は 50 代の男性 4 人で、すごく面白かった。インタビューの対象者ではないですけど、もしこれからさらにインタビューを実施するとしたら、



今の10代と0から9歳まではここになります。それぞれの読書環境、文化環境、生活の中で読書体験も変わってくると思うんですけど、でも共通するものもあるし、新しく見いだせるものもある。最後、次の発表につなげるためにこちらのスライドを見ていただきました。皆さんもこのイメージを持って次の須賀の発表を聞いていただければ嬉しいです。

参考資料・注

- 1) ユニセフ 「人権の歴史と「子どもの権利条約」ができるまで」
<https://www.unicef.or.jp/crc/history/> (参照 2024-04-04)
- 2) 全国学校図書館協議会 「学校読書調査」の結果」
<https://www.j-sla.or.jp/material/research/dokusyotyousa.html> (参照 2024-04-04)
- 3) 衆議院 「子ども読書年に関する決議案（第一四五回国会、決議第三号）」
https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_gian.nsf/html/gian/honbun/ketsugian/g14517003.htm (参照 2024-04-04)
- 4) 文部科学省「自治体の子供読書活動推進計画の策定率が増加しています！ 令和4年6月24日」
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/mext_01044.html (参照 2024-04-04)
*発表の際は令和3年度末の数字を示したが、令和6年1月22日に文部科学省が令和4年度末の策定率を発表した。そちらによれば市96.4パーセント、町村78.6パーセントが策定。
文部科学省 子ども読書の情報館「自治体の子供読書活動推進計画の策定率について」
<https://www.kodomodokusyo.go.jp/happyou/datas.html> (参照 2024-04-10)
- 5) NPO ブックスタート「全国の実施状況」
<https://www.bookstart.or.jp/coverage/> (参照 2024-04-04)
- 6) 電子出版制作・流通協議会「電子図書館(電子書籍サービス)導入図書館」(参照 2024-04-06)
https://aebs.or.jp/Electronic_library_introduction_record.html
- 7) 新井紀子著『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』東洋経済新報社、2018、287p.



「インタビューから子ども時代の

『心に残る読書体験』に近づく試み」

須賀千絵 (実践女子大学文学部)

実践女子大学の須賀です。「インタビューから子ども時代の『心に残る読書体験』に近づく試み」というタイトルで発表いたします。これは科研の研究報告です。科研費とは、国が科学研究費を助成する事業です。私どもの「子ども時代の『心に残る』読書に関する実証的研究：読書体験の形成要素と長期的効果」はこの科研費をいただいて、2019年度から2023年度にかけての期間で研究を進めてまいりました。須賀と汐崎の2名の共同研究です。

まず、この研究をするにあたっての問題意識と先行研究についてお話しいたします。子どもの読書の実態や子どもの読書の効果については、多くの調査や研究の蓄積があり、量的な方法によるものと質的な方法によるものがあります。例えば量的な方法としては、全国学校図書館協議会などによる「学校読書調査」¹⁾が1955年から調査を積み重ね、そのデータを使った研究もごございます。また文部科学省なども、子どもの読書活動の実態についての調査研究を、複数回、実施しております。2013年の国立青少年教育振興機構による研究では子ども読書活動の実態とその影響をテーマに、大規模なアンケートを実施しています²⁾。

質的な方法によるものとしては、石井桃子が1965年に出版した、岩波新書の『子どもの図書館』があります³⁾。これは古典的な名著で、文庫にきた子どもたちが本を読んでいる様子を観察した結果をまとめたものです。大学生が子ども時代の読書を振り返って書いた手記を集めて、分析した山口雅子の本⁴⁾などもごございます。この2冊は研究というスタンスで書かれたものではないのですが、非常に優れた質的な研究の一つとして挙げてよいかと思えます。

読書の効果については、認知的な効果と非認知的な効果の両方がある、と言われていています。認知的な効果とは、知能検査で測定できる能力のことで、例えば読解力など、いわゆる学校で測れるような能力のことだと思っただけなのですが、その他にも非認知的な効果、例えば協調性、向上心、積極性など、そのような点でも読書は効果があるという研究成果がいくつか発表されています。成人期への影響、すなわち子

報告の対象

科研費(科学研究費助成事業)

科研費基盤研究(C)19K12722

2019~2023年度

子ども時代の「心に残る」読書に関する実証的研究：読書体験の形成要素と長期的効果
須賀千絵(研究代表者)、汐崎順子

2024/3/9

科研費研究成果報告会

2

1. 先行研究と問題意識

先行研究

子どもの読書の実態

- ・量的方法
 - ・統計 「学校読書調査」(全国SLA・毎日新聞社1955-)
 - ・アンケート (国立青少年教育振興機構2013) など
- ・質的方法
 - ・観察 『子どもの図書館』(石井1965)
 - ・手記の分析 (山口2014) など

全国学校図書館協議会・毎日新聞社「学校読書調査」、1955-、2022年以降は全国SLAが単独で実施。
国立青少年教育振興機構「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究」2013、192p。
石井桃子『子どもの図書館』岩波書店、1965、218p。
山口雅子『絵本の記憶、子どもの気持ち』福音館書店、2014、103p。
2024/3/9 科研費研究成果報告会

4

読書の効果

- ・認知的効果(知能検査で測定できる能力)、非認知的効果(向上心、協調性など)
- ・成人期への影響
例 「成人の意識・意欲・行動」(自己肯定感など)に対する「子どもの頃の読書の充実」(読書量・多様性など)の影響力が高い(濱田2016)

濱田秀行ほか「子どもの頃の読書が成人の意識・意欲・行動に与える影響」『読書科学』58(1)、2016、p.29-39。

2024/3/9

科研費研究成果報告会

5

ども時代に読書をしたことは大人になってから何らかの影響があるのか、という研究では、先ほどの文科省のアンケートを使った濱田（秀行ら）の研究があります⁵⁾。濱田は大人になってから自己肯定感が高く、意識や意欲があり、行動が積極的であることに対し、その人の子ども時代の読書が充実したものであったことは、個人の年収などより大きな影響があるという研究成果を出しております。このような読書の研究の積み重ねがございます。

ただ、そのような研究を見ていく中で、私どもは少し違和感を覚えました。それは、1冊1冊の本のインパクトの違いというものがあまり考慮されていないのではないかと、ということです。例えば何冊読んだ、何時間読んだ、また先ほどの文科省の研究では「忘れられない本があるかどうか」というアンケート項目もありましたが、人によって忘れられない度合いは違うのではないかと、思うのに、「忘れられない本」として一括されているなど。そこが少し違和感を覚えるところでした。

現場の図書館の方や子どもの本に関わる方は、子どもが喜ぶ本を提供したいと、思っている工夫をいろいろいらっしゃいます。そういった一冊一冊をていねいに手渡していることも、研究の中では捨象されてしまっているのではないかと、とも感じました。それでは、インパクトの大きい、大人になっても心に残る読書体験ってどんなものなのだろう、それはそうではない（心に残らない）読書とどこが違うのかについて知りたい、と、思っこの研究を始めました。

私どもは、読者の心を動かして、大人になっても記憶に残る読書体験を、「心に残る読書体験」と名づけて研究を始めました。研究にはデータとなるものが必要であり、子どもの頃の読書の様子を知るには、手記を読む、アンケートを行う、インタビューを行うというような方法が考えられると思います。まず手記では先ほどの山口の本がありますけれど、私どもにはほかに使用可能な既存のまとまった分量の手記がありませんでした。個人的には、例えば授業で集めているレポートなどはありますが、遑って研究に使ってよいという許諾は取れていないので研究には使えない。アンケートについては情報量も少ないし断片的なので、（読書体験の）文脈などを知るには不十分であることから、インタビューを行うことにしました。

問題意識

- 1冊1冊の本から受けるインパクトの違いが考慮されていない。
- 大人になっても「心に残る読書体験」とは何か。

2024/3/9

科研究報告書

6

「心に残る読書体験」



2024/3/9

科研究報告書

7

2. 研究の方法

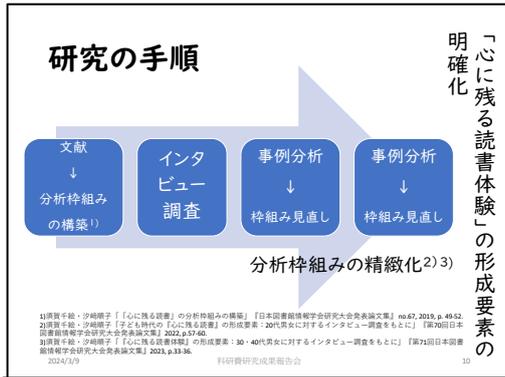
研究に使用するデータ

- 手記
 - ⇒ 研究に使用可能な既存のものがない
- アンケート
 - ⇒ 得られる情報が少なく、断片的
- インタビュー
 - 2022年7～9月に実施
 - 20～60代男女19名

2024/3/9

科研究報告書

9



分析の枠組み

テキスト	コンテキスト	読者
読んだ作品やその一部	読者が置かれた環境	読者自身の特性や読むことに関連した行動
コードの例		
作品 登場人物 文章 絵 など	時間 空間 周囲の人々 など	読書のきっかけ 読みのスタイル 内面変化 性格 能力 など

- 読書研究で示された観点
- 読書体験の記録集 (Carlsen & Sherrill | 1988, 山口2014) の分析

2024/3/9 科研究研究発表報告会 11

インタビューの対象

スノーボールサンプリング

年齢	男性 (人)	女性 (人)	計 (人)	職業等
20代	2	2	4	大学院生2、団体職員(読書振興)、会社員
30代	1	2	3	大学院生、文筆業、図書館員
40代	2	1	3	図書館員、会社員(児童書出版)2
50代	4	3	7	図書館員(注)3、団体職員2(内読書振興1)、文筆業、公務員
60代	1	1	2	文筆業、図書館員
計	10	9	19	

注)元職員含む

2024/3/9 科研究研究発表報告会 12

- ### インタビューの進め方
- 対面またはオンライン
 - 単独またはグループ(2~4名)
 - 子どもの頃の「心に残る読書体験」について尋ね、自由に語ってもらう。
 - 読書体験の定義はしない
 - 年齢順に記憶をたどる
 - 1組 2時間程度
- 2024/3/9 科研究研究発表報告会 13

分析の例 (30代B「父の読みかせ」部分)

時間

2B: いつも寝る前に、父親を真ん中にして川の字に寝て、頭の上に本をのせてもらって、
インタビュー: おおむけになって、周囲の人々

2B: ここに妹と私が両側にいて本を聞かせていう形で、読み聞かせしてもらったので、漏れなく同じ本をずっと読んでもらってました。
インタビュー: 読み聞かせは、お父さま? 読みのスタイル

2B: お父さんですね。
インタビュー: お母さんではなくて、お父さん。

2B: うん。母親にもらった覚えが全然なくて、ずっと。(略)5歳ぐらいは、もうしてもらっていて、そこから小学校の私が高学年、妹が中学年ぐらいまでは、聞いてましたね。
時期

2024/3/9 科研究研究発表報告会 15

先ほどの汐崎の発表にもあったように2022年の7月から9月にかけて、男女19名に対してインタビューを行いました。研究の手順としては、まず山口の研究や、欧米の研究も見て、読書研究の中ではどのような分析の観点があるのかを参考に、仮の分析枠組みをつくりました。そしてインタビュー後に、その事例を分析しました。20代、30代と、インタビューした順に分析をして、その都度、枠組みを見直すということを繰り返して枠組みの精緻化を図り、最終的に「心に残る読書体験」はどのような要素からできているか、ということをはっきりさせていきたい、と考えて進めてきました⁶⁾7)8)。

分析の枠組みは、既存の読書研究などから大きく「テキスト」、「コンテキスト」、「読者」という三つの観点を考えました。「テキスト」は、読んだ作品や、その作品の部分のことです。「コンテキスト」は、どのような環境で読んだかとかということです。これらはCarlsenとSherrillの“Voice of Readers”という、子どもの頃を振り返った手記を集めた本とか、先ほどの山口のものなどを参考につくりました。

インタビューの対象はこの19名です。世代をなるべく分散させ、男女比も大体均等にしました。それから本について語れそうな人を、スノーボール・サンプリング、つまり知り合いの人に声をかけて、その知り合いの知り合いを連れてきてもらって、といった感じで集めました。ですから本に関係する職業の人が比較的多くて、いわゆる平均像というよりも、かなり本に親しみのある人が多い構成になっています。

インタビューは対面とオンラインと両方で進めました。そして、グループインタビューと、そうでないものがあります。子どもの心に残る読書体験について尋ねて、自由に語ってもらう、という形で始めて、読書体験の定義はしないで、(読書の解釈はインタビュー対象者に)お任せしました。小さい頃から記憶をたどってもらいました。(インタビューの時間は)一組2時間ぐらいです。そこからエピソードを、まず、抽出しました。エピソードというのは、特定の本にまつわる話など、話のまとまりですね。1人当たり10件ぐらいだったのですが、そのエピソードをコーディングしていきました。コーディングとはこのスライド(「分析の例」)のような感じで、会話を文字起こししたものに、例えば「いつも寝る前に」は「時間」のコード、ここで「周囲の人々」が出てきたなど、予め設定したコードを振っていくという作業のことです。

3. 研究の結果

分析の進捗

年齢	分析終了	予備分析終了	未了	計
20代	4	0	0	4
30代	3	0	0	3
40代	3	0	0	3
50代	1	4	2	7
60代	0	0	2	2
計	11	4	4	19

2024/3/9

科研究費研究成果報告会

17

(1) テキスト

• 作品

全コード中最多

- 「加古里子さんの『地球』っていう本が大好きで。(中略) いろんな虫とかいろんなものっていうのが、実際にあるものと、加古里子さんが描いている絵の精密さみたいなものに、すごい衝撃というか、すごく関心を持って、それと同じ本を読み返してました。」(50代C)

加古里子文・絵『地球』福音館書店、1975、56p.

2024/3/9

科研究費研究成果報告会

19

• 知識・情報 (本の一部)

- 「これ(『冒険図鑑』の野外トイレ¹⁾)は(大人になってから)被災地で本当に役に立ちました。(中略)これは頭に入っていたので。」(40代F5)
- 作品の内容には言及なし
- 学校教材の『国語便覧』に掲載された本を片っ端から読んだ(20代A9)

1) さとうち藍文・松岡道長絵『冒険図鑑』福音館書店、1985、198-199p.

2024/3/9

科研究費研究成果報告会

20

(2) コンテキスト

• いつ、どこで、誰と

• 周囲の人々

- 本を勧める
- 一緒に読む: (読んでくれた父親が笑ってくれたが)「自分では面白さがわからなくて」(20代B1)
- 取り上げる: 「(マンガの)『コージ苑』なんか、ちょっと下ネタも入ってるから、もちろん学校で、そういうの読んじゃいけないし、でも、学校で先生に見つかって、取り上げられて。(40代E10)」など

• 流行(トレンド)

- クラスや社会の流行

2024/3/9

科研究費研究成果報告会

21

今日は(19人中)15人の分析が終わったところでの発表になります。そして「コード別の出現エピソード件数」は、コーディングと分析が最終的に終了しているこのうち11人分(データに基づく)結果です。本についてのコードである「作品」が最も多く、あとは「コンテキスト」のコードに該当する「誰と読んだ」とか、「読者」のコードに該当する、「いつ読んだ」、「読みのスタイル」、「読む以外の行動」、「内面」などが多かったです。

コード別出現エピソード件数
(分析終了20代~40代 11人分) (単位:件)

テキスト		コンテキスト		読者	
テキスト *	16	時間	35	時期 *	58
ジャンル	35	空間	47	きっかけ	37
作品	111	周囲の人々	53	読みのスタイル	54
作品の部分	16	流行(トレンド)	13	読む以外の行動	58
登場人物	8	内面		50	
ことば	3	発達/能力		5	
絵	23	過去の経験		9	
物理的要素	16	その後の自分との関係性		35	
知識・情報 *	8	現在の解釈 *		22	
出版関連情報	6	性格		5	
		読書観		5	

* 30・40代調査で追加・変更

2024/3/9

科研究費研究成果報告会

18

例えば「テキスト」については、「実際にあるものと、加古里子さんが描いている絵の精密さみたいなものに、すごい衝撃というか、すごく関心を持って、それで同じ本を読み返してました。」、こういったものが非常に典型ですね⁹⁾。

本全体というよりも、その一部がとても心に残っている、というものもありました。特にノンフィクションなどでは「知識・情報」というコード名をつけましたが、例えば、この40代の方は『冒険図鑑』¹⁰⁾というアウトドアの本がすごく好きで、(内容が)頭に全部、入っていて、大人になってから(東日本大震災の)「被災地でトイレをつくるときに、その絵が浮かんで、そのまま作れた」という話をしてくれました。一方、本のことを語っていても、その本の中身とは関係ない記憶もありました。例えば、「学校教材の『国語便覧』に掲載された本を片っ端から読んだ」などです。

「コンテキスト」というのは読書の状況のことで、例えば「いつ、どこで、誰と」というのが非常に典型的なものです。「誰と」というのは周囲の人々のことなのですが、周囲の人々が何かをしてくれること、例えば、本を薦めてくれたり一緒に読んだりすることです。ネガティブな関わり方、例えば「(本を)取り上げられた」というのもありました。マンガを読んだら先生に見つかって取り上げられた、これも周囲の人々の関わり方の形です。特定の誰かではなくて、なんとなくクラスで流行っていたとか、社会で流行っていたのが本を手取る

(3) 読者

・内面

- ・好きだった、おもしろかった、感動した など
- ・不快な感情：マンガを読んでいるのを家族に見られて恥ずかしかった(20代B11) など

・内面+読む以外の行動

- ・図書館で自分の好きな本が借りられないように隠した(20代B7) など

2024/3/9

読書研究発表報告会

22

・読みのスタイル

- ・くりかえし読む：「『たのしい川べ』をだからもう一回、読み直して。中学で読んだけど、大学生になっても実際に、カヌーが好きになって、カヌーを自分で買って。」(50代D)
- ・同じジャンルやシリーズの本をまとめて読む(30代C4他) など

・読む以外の行動

- ・持ち歩く(20代B5他)
- ・図鑑を見て絵を写す(20代D1他)
- ・まねて文章を書く(40代E他) など

2024/3/9

読書研究発表報告会

23

読んでから時間をおいての考え、行動

現在の解釈

「『ちいさいおうち』『せいめいのれきし』はこまマンガ。ああいう感覚じゃないかなと思うんですけど。動いていって読む。だから、それは、もちろん時間なんですよけれども、そういうのが、ちょっとあったような気がする。有機的に絵が動くとは言えないけれども、同じ場所の風景が変わっていくところでは、それが定点観測なんですよけど。(40代E1)」

Burton, Virginia Lee 『せいめいのれきし』いっしょもこ訳, 岩波書店, 1964.
Burton, Virginia Lee 『ちいさいおうち』いっしょもこ訳, 岩波書店, 1965. (大型絵本)

2024/3/9

読書研究発表報告会

24

4. 考察

4.1 読書体験の範囲

・読む前の行動

書店で本を買う など

・読んだ後の行動

食べ物の絵をなめる(30代A1)/ 読んだ内容を記事にして新聞を作る(30代C5)/ 『ナルニア国物語』を読んだ後に和ダンスの中にリュックに食べ物を詰めて入った(50代A) など

・数年後の行動:

自分でかつて読んだ本を妹に読み聞かせた(40代E1)など

2024/3/9

読書研究発表報告会

25

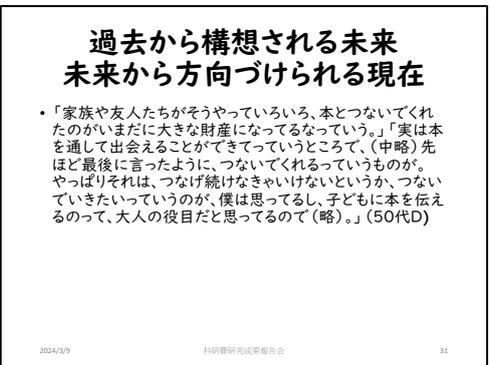
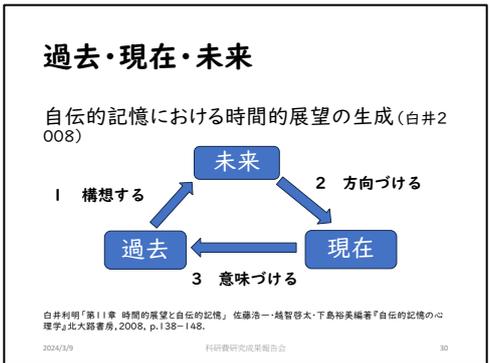
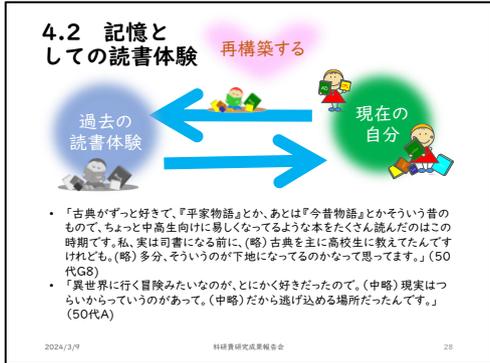
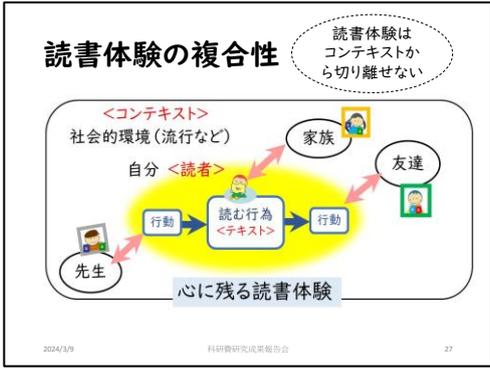
きっかけになった、というお話もありました。

次は「読者」です。「内面」にあたる、好きだった、面白かった、感動した、というものがたくさん出てきたのは当然ですが、(一方で、)本を読んで非常に苦しくなった、というものもありました。例えば、マンガを読んでいるのを見られて恥ずかしかった、などです。そして内面の変化をきっかけに、何か次の行動に結びついた、というものもありました。本が好きで、その本が他の人に借りられないように隠した、などです。

「読みのスタイル」とは、繰り返して読むとか、まとめて読むとか、そういった読み方の特徴です。(また)「読む以外の行動」もたくさん出てきました。例えば、気に入った本を持ち歩いていて、図鑑を見て絵を写した、文章をまねて書いたなどです。そして年齢層が上の人に話を聞くと、子ども時代の出来事そのものではなくて、だいぶ時間をおいてから振り返っての感想も、出てきました。例えば『せいめいのれきし』¹¹⁾について、「どうしてこの本が好きだったのか」を思い起こして話しているところで、これは時間の流れを感じさせるもの、「同じ場所の風景が変わっていく」という「定点観測」のようなところに面白さを感じていたのではないかと、今、思っているとといった話がありました。子どもの時は抽象化した考え方は持てなかった意識はできないけれど、今、思うと、このようなことではないかといった話が出てきました。

これらをまとめると、どのようなことが言えるか、ということと、まず「読書体験の範囲」を示すことができました。読書は読むだけではない、読む行為だけではない、ということです。読む前に、書店で本を買う、とか、薦められたという話も、読書体験についての発言中に頻繁に出てきました。食べものの絵を見て、読んだ後おいしいんじゃないかと思ってなめてみたとか、新聞を作ったとか。またダンスを通して他の世界に行く『ナルニア国ものがたり』¹²⁾を読んで、実際に行けるんじゃないか、と思って、リュックに食べものを詰めて、家の和ダンスに入った。でも、(ナルニアの国には)行けなかった、と話してくれた人もいました。

自分がかつて読んで気に入っていた本を、妹にも読んであげたと話してくれた人もいました。つまり、読書体験は、その本を読む行為だけではなくて、その前後に広がっていて、さらに読者を超えて周りの人と相互作用するところまで入るこ



とがある。家族とか友達とか先生とか、場合によっては社会の環境や流行などとの相互作用でもある。つまり読書体験は複合的な体験で、自分の生活とそこに埋め込まれたものであり、読書体験から「コンテキスト」は切り離せないのだ、ということが分かってきました。

こうした読書体験は、今思い起こして語っているものであり、過去の冷凍保存ではありません。それは今、自分の子ども時代を思い起こして再構築したものです。ですから、「当時考えたもの」ではなくて、「今、思うとこうです」という話もたくさん出てきました。例えば古典を読んでいたことが、高校の教員になった時の下地になった。あるいはかなり複雑な家庭環境だった方が、自分は異世界に行く冒険の話が好きだった、それはつらい現実から自分が逃げ込める場所だったというように、今思い起こしての語りがたくさんありました。

読書体験は、自分についての記憶であり、心理学でいう自伝的記憶というものの一つです。そしてこの自伝的記憶は自己の一貫性を保ち、他の人とのコミュニケーションにおいて役立ち、(さらに)行動を方向づけるという機能があると心理学では言われています¹³⁾。この自伝的記憶に関する研究では、過去、現在、未来は、時間軸に(直線的に)沿って進むのではなくて、過去を思い起こすことで未来が構想され、(未来から)現在が方向づけられ、(現在から)過去が意味づけられるという考え方があります¹⁴⁾。つまり過去を介して未来を考えることができ、その未来から今、じゃあこうやって生きていこう、という現在になる。過去、現在、未来という時間軸で進むのではなくて、今、思い起こした過去であるということが大事だ、ということです。

例えば、過去から未来を構想し、未来から方向づけられた例として、ある50代の人が、家族や友人たちが、自分と本をつないでくれたことが、大きな財産になっていて、そして、自分も(子どもと本を)つなぎ続けていかなければいけないと思うようになった。そして子どもに本を伝えるのが大人の役目だと思っている、と話してくれたのですが、この人は、実際に読書振興の活動をなさっています。過去を思い起こすことで、これからも今の仕事をやっていきたい、という気持ちが示されていることが分かるかと思います。

現在から過去を意味づけた例としては、先ほどのタンスに入った人は、お笑いとか冒険が好きで、行くだけじゃなくて帰ってこられる物語を作りたいと思って、演劇の仕事を始め

現在から過去を意味づけ

- 「好きだったのがお笑いとかこういう冒険だったり、逃げ込めて、ちゃんと『ナルニア国物語』みたいに、行って帰ってこれる物語を作りたいと思って(演劇の仕事始めた)。」「大人が行って帰ってこれる物語につながったのは、多分、子どもの頃、つらかったときに本の中で待っててくれた物語たちがいたからかなと思っています。」(50代A)
- 「司馬遼(太郎)が、全国いろんな歴史マップを巡るっていうのが、(中略)中学・高校で読んで、それがすごく面白くて。日本史から中国史、中国史から世界史、世界史でいくとそういう、なんで戦争が起こっちゃったのかとか、なんで争いが起こるのかっていう話に興味があって、それが結局、今の仕事につながっちゃうんですけど。」(50代C)

2024/3/9

読書研究発表委員会

32

4.3 従来の読書研究との違い

従来の研究		本研究
客観主義 真理(知識)は客観的に存在する	基本的立場	構成主義 知識は周りの人やものとの相互作用の中で主観的に構成される
読書体験や効果は、客観的に把握できる	読書体験との関係	読書体験や効果は、主観的に構成される
データの正確性	重視される点	何がどう変容し、自己に組み込まれるか

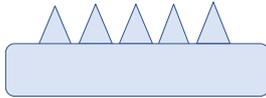
2024/3/9

読書研究発表委員会

33

真実?

「(高校の時に筆入れを触って)この感覚、なんか私、絶対知ってると思って、すごい考えてて。そしたら、(小さいころに読んだ)『へなそうる』の背中だっと思ってんです。」(50代2 G3)



筆入れの装飾のイメージ

参考) わたなべしげお作・やまわきゆりに絵 『もりのへなそうる』
福音館書店、1971、p.70-71.

2024/3/9

読書研究発表委員会

34

4.4 研究の妥当性の検証

- ・内的妥当性:
結果がどの程度信頼できるか(他の要因の排除などの統制)
⇒読書体験の記憶について、厳格な統制は困難
- ・外的妥当性:
研究結果をどの程度一般化できるか
⇒複数の属性の人々に共通、他分野の体験・活動にも共通であることを示す

2024/3/9

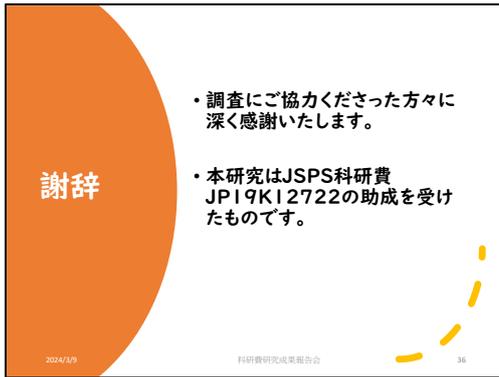
読書研究発表委員会

35

た、「大人が行って帰ってこれる物語につながったのは、多分、子どもの頃、つらかったときに本の中で待っててくれた物語たちがいたからかなと思っています。」と言っています。またもう一人の50代の方は、司馬遼太郎の歴史の本がとても面白かった、そして、「なんで戦争が起こっちゃったのか」といった関心が出てきて、「今の仕事につながっちゃうんですけど」と言っています。この人は国際支援の仕事をしていた方で、過去を思い起こすことで、今、なさっている仕事の意義を考えて、過去(の読書に)あんな意味があったと言っていることが分かるかと思います。

まとめると、従来の研究は客観主義、つまり真理や知識は客観的に存在するという立場ですが、本研究は構成主義、つまり知識は主観的に作られるという立場にいてるのではないかと感じるようになってきました。つまり、客観的に「1冊の本」、「1時間の読書」があるのではなくて、読書の意味や読書の内容は主観的に構成されるものということです。何がどう変容して自己に組み込まれるか、が大事で、データが(客観的に)正確か、というところが大事なのではない。例えば、真実かどうか、という点については、このような例がありました。高校生のときに筆入れを触って、「この感覚、なんか私、絶対、知ってると思って」考えたら、これは昔、読んだ『もりのへなそうる』¹⁵⁾のへなそうるの背中だと思ったというものです。これは、客観的な真実ではありません。でも、あたかもそう思ったかのような強い印象を残したというところが大事です。こういったことが、先ほどの客観的な形の研究とは違ったアプローチになるかと思います。

でも、研究である以上、妥当性を検証しなくてはなりません。では、どうやって検証すればいいのか。例えば内的妥当性と外的妥当性という二つの考え方があります。同じことが何回も実験で検証できるか、結果がどの程度信頼できるか、他の要因はないかという点では、私どものインタビューは同じ話を繰り返したり聞いたりできないので、内的妥当性はないのですが、研究結果をどの程度、一般化できるか、他の分野とか、他のシチュエーションで同じことが言えるかという点では外的妥当性がある、と言えるのではないかなと思います。読書体験の研究も、例えばある記憶が複数の属性の人に共通するとか、ミュージアムや教育などの違う分野でも同じようなことが言えそうといった形で、共通性があることが示していけるのではないかなと思っています。



最後に調査にご協力いただいた方々に深く感謝いたします。
本研究は最初に紹介した科研の助成を受けたものです。
ありがとうございました。

参考資料・注

- 1) 全国学校図書館協議会・毎日新聞社「学校読書調査」.1955-.
2022年以降は全国学校図書館協議会が単独で実施。
- 2) 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究」2013, 192p.
- 3) 石井桃子『子どもの図書館』岩波書店, 1965, 218p.
- 4) 山口雅子『絵本の記憶、子どもの気持ち』福音館書店, 2014, 103p.
- 5) 濱田秀行ほか「子どもの頃の読書が成人の意識・意欲・行動に与える影響」『読書科学』58(1), 2016, p.29-39.
- 6) 須賀千絵・汐崎順子「『心に残る読書』の分析枠組みの構築」『日本図書館情報学会研究大会発表論文集』 no.67, 2019, p. 49-52.
- 7) 須賀千絵・汐崎順子「子ども時代の『心に残る読書』の形成要素：20代男女に対するインタビュー調査をもとに」『第70回日本図書館情報学会研究大会発表論文集』2022, p.57-60.
- 8) 須賀千絵・汐崎順子「『心に残る読書体験』の形成要素：30・40代男女に対するインタビュー調査をもとに」『第71回日本図書館情報学会研究大会発表論文集』2023, p.33-36.
- 9) 加古里子文・絵『地球』福音館書店, 1975, 56p.
- 10) さとうち藍文・松岡達英絵『冒険図鑑』福音館書店, 1985 p.198-199
- 11) Burton, Virginia Lee 文・絵『せいめいのれきし』いしいももこ訳, 岩波書店, 1964, 76p.
- 12) Lewis, C.S.作・Baynes, Pauline 絵『ナルニア国ものがたり』瀬田貞二訳, 岩波書店, 1966, 7冊.
第1巻『ライオンと魔女』の中に、子どもたちがタンスを通過してナルニア国に行くシーンがある。
- 13) 佐藤浩一「第5章 自伝的記憶の機能」佐藤浩一・越智啓太・下島裕美編著『自伝的記憶の心理学』北大路書房, 2008, p.63-68.
- 14) 白井利明「第11章 時間的展望と自伝的記憶」佐藤浩一・越智啓太・下島裕美編著『自伝的記憶の心理学』北大路書房, 2008, p.138-148.
- 15) わたなべしげお作・やまわきゆりこ絵『もりのへなそうる』福音館書店, 1971, p.70-71.



「ミュージアム体験の長期記憶に関する研究の展開」

湯浅万紀子（北海道大学総合博物館）

皆さま、こんにちは。北海道大学総合博物館の湯浅万紀子と申します。今回は須賀先生、汐崎先生のこの研究会にお招きいただきまして光栄に存じます、ありがとうございます。ご発表を聞いていて、本当に私の研究とオーバーラップする部分が多く、とても勉強になりましたし、これからいろいろまた交流ができたらと思っております。よろしく願いいたします。

私、実は国立情報学研究所の神門典子先生と中学、高校時代の同級生でして、そのご縁で今回ご紹介いただいて、ここに皆さまとお会いすることになりました、よろしく願いいたします。きょうの発表は、まず簡単に自己紹介をしましてから、ミュージアム体験の多様性、そして体験の長期記憶に関する調査研究、そして最後にミュージアム体験を捉える意味についてお話したいと思っております。

私は2006年に北海道に参りました。博物館の教員で、なおかつ大学院では理学院で学生たちを指導しております。学生教育としましては、ここに示しました科目を教えたり、博物館独自のリソースを生かして、学生たちに全人教育としてミュージアムの資源を使っていろいろな可能性を広げてほしい、という「ミュージアムマイスター認定コース」という教育プログラムを展開しております。そのガイドブックを回覧いたしますので、よろしければご覧ください。併せて博物館のパンフレットもご紹介したいと思います。その他にも博物館の教員ですので来館者対応ですとか、200名近くいらっしゃるボランティアさんのマネジメント担当、展示解説グループの担当をしたり、博物館の各種ワークショップやイベントの対応をしております。

学生たちの教育に関しましては、例えばミュージアムグッズを開発する、という授業も担当しております。大学博物館のミュージアムグッズはどうあるべきかということを考えながら、あとは売れ行きが上がるものができるかどうかということも考えながら、学生たちとグッズを開発しております。これが実現してきた数々のグッズです。必ずグッズには解説書をつけております。扱ったモチーフに関する研究の紹介などについて、学生たちが執筆しまして専門家の方に監修して

0. 自己紹介

1. ミュージアム体験の多様性
2. ミュージアム体験の長期記憶に関する調査研究
3. ミュージアム体験を捉える意味

0. 湯浅万紀子 自己紹介

2006年11月～

- ・北海道大学 総合博物館 博物館教育・メディア研究系
- ・北海道大学 理学院自然科学専攻 科学コミュニケーション講座 博物館教育学研究室

◆学生教育

全学教育科目、
学芸員養成課程「博物館教育論」、「博物館実習」
理学院専門科目・大学院共通授業
「博物館コミュニケーション特論」
Ⅰ 学生発案型プロジェクトの企画・運営・評価
Ⅲ ミュージアムグッズの開発と評価

◆博物館の資源を活かした全人教育
ミュージアムマイスター認定コース

◆北大総合博物館 来館者対応
来館者・学校見学などへの対応アレンジ・解説

◆北大総合博物館 ボランティア対応
展示解説グループ担当
ボランティア全体のマネジメント

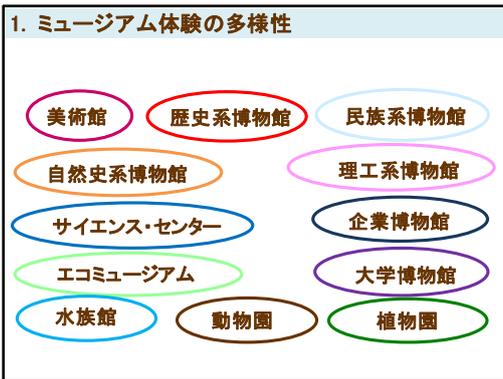
◆北大総合博物館 各種ワークショップやイベント対応

いただいた解説書を付してグッズとして実際にミュージアムショップで販売しております。そこには学生たちの名前も載っております。売れ行きがいいものは学生たちが卒業してからもずっと残って、ミュージアムショップで販売されていく。これは、北大の校章にもなっているオオバナノエンレイソウという植物をモチーフにして留学生がサコッシュを作りました。その他にもミュージアムショップのショッパーをもっと大学博物館らしいものにしたいと新たにデザインしました。

最初のお話に移りたいと思います。私が「博物館」という言葉を使わずに「ミュージアム」という言葉を使っているのは、博物館法という法では、水族館や動物園、それから植物園も博物館に入っているのです。このように多様な博物館が存在します。いろいろもっとあるかもしれませんが。皆さまも子どもの頃から、これらのどこかには、おそらく遠足やご自身で興味、関心をお持ちで訪れたことがあると思います。これからのお話は、皆さまのミュージアム体験を思い出しながら聞いていただければと思います。

私自身の研究テーマは、次の通りです。まず、ミュージアムの関与者のミュージアム体験に関する調査研究で、全体的なテーマとしましては、「記憶の中の博物館」として研究を展開してまいりました。その他にも、大学博物館における複合教育プログラム。学生が博物館活動の担い手となって大学と社会、博物館と社会を結ぶ教育プログラムを実施して、それがいかに効果があったか、課題があるのかを評価しております。それから博物館評価に関する研究、あと時代によってミュージアムのあり方や社会からの要請が変わりますので、新しいミュージアム像に関する調査研究などを行っています。

先ほど申しましたように、皆さまにとって最も印象に残っているミュージアム体験ってどのようなものでしょうか。子どもの頃から動物園に行ったとか、美術館に行って何々を見た、そういうことを思い出しながら聞いていただきたいのですが、実はこの問いは、1994年、もうだいぶ前になりますけれども、Public Institutions for Personal Learning という会議で最初に発せられた質問でした。



- ◆ 湯浅の研究テーマ:
- * ミュージアム体験の長期記憶の検証と評価
「記憶の中の博物館」
大学博物館・科学館・歴史系博物館
企業博物館など各種ミュージアムの関与者の
ミュージアム体験に関する調査研究
 - * 大学博物館における複合教育プログラム
(学生を博物館活動の担い手とする教育)の評価
 - * 博物館評価
 - * 新しいミュージアム像に関する調査研究

あなたにとって最も印象に残っている
ミュージアム体験とは？

↑

Public Institutions for Personal Learning:
Establishing a Research Agenda (1994)

語られた記憶: 幅広い内容・極めて個人的な性質

- ・家族との会話が弾んだ展示物
- ・同伴者やスタッフとかわした会話
- ・自分の知識と展示物を関連づけて「分かった!」という体験をさせる
ミュージアムの力
- ・展示室内の環境など物理的側面
- ・博物館疲労

*ミュージアムで人びとが得るアウトカムは幅広い

*ミュージアム体験のインパクトは、個人の人生という文脈で人々が利用できる様々なリソースの中で捉える

*free-choice learningの価値を、市民、学習者、ミュージアムスタッフ、ミュージアム研究者、政策決定者で議論する

*ミュージアムの学習を、長期的に継続して調査研究する

12

欧米には膨大な研究の蓄積

研究目的: 来館者開拓 → マーケティング

満足度調査、展示評価

科学系博物館における学習効果の測定

以後、博物館の学習効果についての調査報告件数は増加。

主に博物館での学習が数ヶ月を経て保持されているかという点での記憶の研究も。

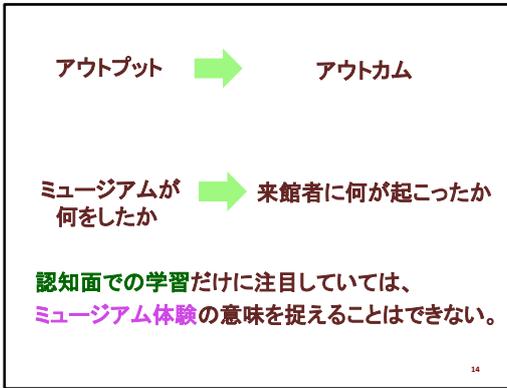
同時に、湯浅の個人的な問題関心も...

この会議に参加された方々にミュージアム体験を聞き取ってみると、幅広いミュージアム体験が語られました。家族との会話が弾んだ展示物のこと、同伴者やスタッフと交わした会話、あとは、これ、分かったといった体験したミュージアムの力、それから博物館の展示室の中での物理的な側面。博物館って結構、見ていると疲れませんか。たくさん歩いていて疲れてしまって、ちょっと休憩したりとか、そういうような気持ちを持つような博物館疲労に関する事など、本当にさまざまなことが語られたのですね。

総括しますと、ミュージアムで人々を得るアウトカムがとても幅広いということが確認されました。そしてそのインパクトは個人の人生という文脈、コンテキストで、人々が利用できるさまざまなリソースの中で捉える必要がある、博物館だけがこれに貢献しているのではなくて、その他のいろいろなバックグラウンドから影響されているということも注意しなければならないということが確認されました。それからfree-choice learningの価値を、研究者だけではなくて市民や学習者、それからスタッフの方々、あと政策決定者で議論していく必要がある、ということも確認されました。そしてなおかつ、ミュージアムの学習をその場限りではなくて長期的に継続して調査研究する必要があるということが確認された会議でした。

欧米ではとても多くの研究者がいて、来館者調査の蓄積があります。例えば博物館の来館者数を増やすためのマーケティング調査、来館者を開拓するための調査がありました。展示評価、展示の満足度の調査ですとか、他にもサイエンスミュージアムにおける学習効果に関する調査もありました。先ほどご紹介しました会議の後は、学習効果についての調査報告件数が増加し、主に学習が数ヶ月を経て保持されているかというような記憶の研究も増えてきました。例えば、てこの原理を示す展示物があって、それを見た直後は分かったという気持ちになっても、数週間経ったら忘れてしまっているかもしれないですね。知識が保持されているかどうかを研究する、記憶の研究も増えてきました。

一方で私の個人的な問題関心をお伝えしますと、私が大人になってから久しぶりに科学館に行きましたら、小さな子どもたちが、私が見たこともないような機械や道具を使ってすごく難しそうな研究をしているんですね。他にも本当にすごく生き生きと自由研究をしている子どもたちの姿を見まして、



- 調査対象は多様:来館者に限定しない
- * 前職の東京大学総合研究博物館の博物館関連授業の受講生
 - * 北大総合博物館 来館者・関連講座参加者・ボランティア
 - * 全国科学館連携協議会に属する館の現職職員
 - * 北海道大学・神戸学院大学 学生
 - * 名古屋市科学館
来館者・ボランティア・友の会会員・学芸員他職員・地域住民・設置部局
 - * 明石市立天文科学館
来館者・ボランティア・友の会会員・学芸員他職員・地域住民・設置部局
- 15

- * 昭和日常博物館
来館者・いきいき隊(地域回想法を受講した高齢者グループ)・学芸員
 - * 竹中大工道具館
来館者・ボランティア・友の会会員・学芸員他職員
- 他にも
- * 科学技術館の来館者・友の会会員・30年前の会員
 - * 科学館で実験演示活動を継続する奈良県の中高校生
 - * 手塚治虫記念館、他...
 - * 秋田公立美術大学 博物館教育論受講生
 - (* 大阪万博・愛知万博の来場者)
- 16

また、過去15年余りの北大の「博物館教育論」の受講生のミニレポートも研究の参照としてきた。

博物館学の研究・教育とは関係の薄い方々にも...

- * 関西の高齢者大学の学生(高齢者)
- * 愛知淑徳大学 メディア専攻の学部生

(影響力の語りは少ないが、多様な体験は同様)

17

一体この子どもたちの将来はどうなるのだろうと思いました。でも子どもたちの未来をすぐに見ることはできないので、それでは時間軸を変えて、昔、子どもだった今の大人に子ども時代からのストーリーを語ってもらおう、という思いから今の研究を始めるに至りました。

一方で博物館界では1990年代、2000年代から博物館評価という動きにさらされる時代になりました。そこでは、アウトプット、ミュージアムが何をしたかというだけでなく、アウトカム、来館者に何が起きたかということも調べる必要があるということが言われるようになりました。そのようななか、私は、何々を勉強した、学んだだけではなくて、ミュージアム体験を幅広く捉える必要があるということ意識して、調査研究を進めてまいりました。

私が今まで20年余り調査してきた対象は、来館者に限定せず、ここに示しておりますように、さまざまな方々に調査に協力していただきました。前に勤めておりました東京大学総合研究博物館の博物館関連授業を受講した学生たち、北大の総合博物館の来館者や講座参加者、ボランティア、全国科学館連携協議会に属する館の現職の職員の方々にもご協力いただきました。それから名古屋市科学館、明石市立天文科学館、来館者に限らず、ボランティアの方とか、友の会の方々、あと学芸員、スタッフの方々、地域住民や館を設置した設置部局の方々にもお話を伺っております。

その他にも昭和日常博物館、こちらは認知症を予防するための地域回想法を実践されている博物館ですけれども、その高齢者グループの方々や学芸員の方々、そして現在は、神戸にあります竹中大工道具館のさまざまな関与者にもお話を伺っています。その他にもここに示しましたさまざまな館でご協力をいただけてきました。

その他にも私が北大で授業を担当しております博物館教育論の受講生に、15年余り、授業の最初に、全く成績に関係しませんから皆さんのミュージアム体験を綴ってくださいというミニレポートを課しています。そうすると本当に自由にいろいろなことが綴られ、それを私が分析した結果を翌週の授業で紹介しますと、同世代の他の学生たちがこんな体験を持っていたのだということを知って驚いたり共感したり、また自分のミュージアム体験を見直すようなことが起こるのですね。

その他にもミュージアムとあまり関係の薄い方々、例えば関西の高齢者大学の高齢者の方々ですとか、他の大学のメデ

ィア専攻の学生たちにも機会を得てお話を伺ったり、レポートを書いていただいたこともあります。博物館と関係の薄い方々も影響力という意味での語りは少ないですが、多様な体験を持っているということに変わりはありませんでした。

次に、私の調査、研究の一部をご紹介しますと思います。明石市立天文科学館と名古屋市科学館での調査をご報告します。皆さまこちらにいらしたことがある方は、いらっしゃるでしょうか。どちらもとても長い歴史を持つ館で、明石は1960年創立、名古屋は1962年創立で、サイエンスセンターであり、プラネタリウムを持っている科学館です。さまざまな教育普及プログラムを展開されていまして、学芸員以外の方々、友の会やボランティア、さまざまな方々が意欲的な活動を展開されています。両館で調査協力してくださる方を募って、数十名の方にお話を伺ってまいりました。

語りの例をご紹介しますと、プラネタリウムの投影内容、これが面白かった、感動した。それから体験型展示を操作した楽しさですとか驚き。学校の勉強で、これこれ、そうだったということを学んだこと。来館をきっかけに理系に進んだというような進路への影響を語ってくださった方もいらっしゃいました。

この辺りはなんとなく想像できると思うのですが、それ以外にも語られたことは、例えばミュージアムショップで買ったグッズのお話ですとか、レストランや売店での食事ですとか、あとミュージアムまでの道のり、ここに行くまでに迷ってしまって、でも大人の人に聞いて助けてもらって、一人で子どもだけでも行けることに自信を持ったということ語る方がいます。あとは帰宅後に何が起こったかということ語る方もいらっしゃいました。

いくつか特徴的な語りをご紹介しますと思います。例えば、家族との思い出を語る方がとても多いです。今は一緒に出掛けることの少なくなった子どもと通った思い出があります。自分の好きなことに子どもも関心を持ってきてうれしかった。プラネタリウムを待つ時間も楽しく、普段家では話せないような学校の話をすることができました。こういうことを意味づける40代の女性もいらっしゃいます。あとこれは名古屋市科学館に寄せられたエッセイですが、いつも私はこれを読むたびに感動するのですが、今は亡きおじいさまに、幼少時によく連れて行ってもらった科学館。研究者になったのは兄。自分は科学館好きな主婦だけれども、今の

明石市立天文科学館・名古屋市科学館での調査事例

明石市立天文科学館
1960年 創立
サイエンスセンター・プラネタリウム
多様な数々の教育プログラム
友の会
ボランティア

名古屋市科学館
1962年創立



明石市立天文科学館中より



名古屋コンシェルジュ中より

■調査協力者の語りの例

- ▶プラネタリウムの投影内容
- ▶体験型展示を操作した楽しさ、驚き
- ▶学校の勉強との関連、進路への影響
- ▶ミュージアムショップで購入したグッズ
- ▶レストランや売店での食事
- ▶ミュージアムまでの道のり、あるいは帰宅後に...

18

▶家族との思い出

- ・今は一緒に出かけることの少なくなった子どもと通った思い出。自分が好きなことに子どもも関心をもってきて嬉しかった。プラネタリウムを待つ時間も楽しく、普段家では話せないような学校の話聞いた。
- ・亡き祖父に幼少時によく連れて行ってもらった科学館。研究者になったのは兄。自分は科学館好きな主婦だが、その子どもが科学好き。祖父のまいた種は確実に家族に...そして愛されていたという温かい記憶。

▶活動仲間への思い

- ・科学に関する専門的な話ができる仲間ができた。

20

自分の子どもが科学好き。祖父のまいた種は確実に家族に生かされている。そして本当に自分はおじいさまに愛されていたんだな、という温かい記憶がよみがえりました、ということを綴られた方もいます。

他には、活動仲間への思い。友の会で一緒に実験・工作するメンバーへの思いを語る方もいらっしゃいます。学校では理系の話をするとけむたがられるけれども、ここに来ると専門的な話を一緒に聞いて楽しんでもくれる仲間がいる、ということの意味づける方たちもいらっしゃいます。

その他にも学芸員のかたがたへの憧れを語る方もいらっしゃいます。解説員に子どもの頃から憧れた。自分は実際には理系に進まなかったけれども現在ボランティアとして科学館に携われて、それがとてもうれしいと語る方もいらっしゃいます。

あと友の会では学芸員の方々からサイエンティフィックな知識だけではなくて、上級生、下級生、目上の人への接し方も教わった。中高時代の人格形成にも多大な影響を受けたということを実感的に語る方もいらっしゃいました。

そして、博物館、科学館は地域のシンボルであり、よりどころであるということの意味づける方もいらっしゃいます。来館しない間、例えば勉強が忙しくなって中高時代はミュージアムに行く人は結構、減るのですね。その後、自分が家庭を持ってお子さまと一緒に再び訪れるというようなトレンドがあり、それについて語る方もいらっしゃいました。

一方で、来館しない間も、電車から見えたりニュースを聞く、いつも心のどこかにミュージアムがあったというふうに語る方もいらっしゃいます。

あとこちらは明石での調査ですが、大阪市内の会社に勤務していて忙しい日々には天文科学館を電車から見るだけだった。電車から天文科学館のタワーが見えるのですね。それを電車から見るだけ。でも定年後に科学館でボランティア活動を始めて、ようやく明石市民になったような気がする、というような意味づけをする方もいらっしゃいます。

更に、名古屋と明石では大きな転換期がありました。阪神淡路大震災、そして、名古屋での大規模な展示リニューアルです。そのことについて関連付けて意味づける方々もいらっしゃいます。

例えば明石の場合、阪神淡路大震災で天文科学館のタワーの時計は止まって休館したけれども、いつか再開すると信じ

▶学芸員への憧れ

・解説員に憧れた。理系に進まなかったが、現在はボランティアとして科学館に関わることができ、嬉しい。

・上級生・下級生、目上の人への接し方も教わった。中高時代の人格形成にも多大な影響を受けた。

▶館は地域のシンボルであり、よりどころ

・来館しない間も、電車から見える・ニュースで聞く。いつも心のどこかにあった。

・大阪市内の会社に勤務していた忙しい日々には、明石市立天文科学館は電車から見るだけ。定年後に活動に関わり始め、ようやく明石市民になった気がする。

21

▶博物館の転換期に関連した語り

阪神淡路大震災、大規模リニューアルなど

・天文科学館の塔の時計はとまって休館したが、いつか再開すると信じていた。

・昔の展示がなくなり、淋しい気持ちも・・・

・リニューアルを契機に再訪し、子どもの頃の体験を思い出し、友の会の会員やボランティアに登録した。

▶過去・現在・未来、個人のライフストーリーでの位置づけ

・今後、友達が来たら、ガールフレンドができたら・・・家族ができたら・・・

・高専に進学した大きな理由の一つが、市内に科学館があったこと。現在も友の会で関わり、今後もずっと・・・

22

ていました、と語る方もいらっしゃいます。名古屋では、リニューアルでとても素敵になったけれども昔の展示がなくなってさびしい気持ちもあります、と語る方もいる。それからリニューアルを契機に再訪して子どもの頃の体験を思い出して、友の会の会員やボランティアに登録しましたという方もいらっしゃいます。

そして、過去、現在、未来、個人のライフストーリーでの意味づけをする方も多いです。例えば過去の思い出を語っていただくことを契機に、今度は自分の友達が遊びに来たら、いざれガールフレンドができたら、家族ができたらまた来てみたい、という未来に思いをはせる方も多くいらっしゃいました。高等専門学校に進学した大きな理由の一つが、市内に科学館があったこと、現在も友の会に関わっていて今後もずっと関わっていききたいというような意味づけをする方もいらっしゃいました。以上が私の調査研究事例の簡単なお報告になります。

私は、ここに示しましたチームで、学際的な共同研究を展開しております。私は博物館教育と博物館評価をテーマとしております。共同研究者は、認知心理学、記憶の研究をされている神戸学院大学の清水寛之先生、British Columbia 大学で博物館学と科学教育を研究されている David Anderson 先生、エピソードの保存の仕方、アーカイブについては博物館映像学を研究していらっしゃる愛知淑徳大学の藤田良治先生で、このチームで研究を展開してまいりました。David 先生を中心にした私たちとの共同研究でカナダの科研の助成を受けたり、私たち 3 名の日本人の研究では、科学研究費の助成を継続して受けて同じテーマで研究をしております。研究のテーマは統一、一貫しておりますけれども、研究の幅は、かなり広がってきています。地域社会での役割と関与者の長期記憶、それから高齢者の異世代間交流、今は企業博物館の多様なステークホルダーの長期記憶に関する研究を行っています。企業博物館、皆さま、いらしたことがあるでしょうか。企業博物館で興味深くユニークなのは、企業のかたがたのトレーニングの場、社員研修の場として利用されている点で、その辺りを含めて今は研究しております。



Andersonと清水、湯浅の博物館関連の調査研究

博物館体験と「懐かしさ」反応に基づく
来館者の長期記憶に関する研究

研究助成: カナダ政府人文社会科学研究評議会
 研究期間: 2012年9月 - 2018年8月
 代表者: David Anderson
 研究分担者: 清水寛之、湯浅万紀子

24

湯浅と清水、藤田による学際的な共同研究:

日本学術振興会科学研究費補助金による研究
以下のように、問題関心を深め、調査対象を広げて博物館体験の長期記憶に関する質問紙調査(アンケート)・面接調査(インタビュー)を実施し、記憶の特質と広がり、博物館評価における意味について、他要因との関連も考慮した上で研究を継続して展開している。

- ◆平成21～23年度
博物館体験に関する長期記憶研究に基づく
新たな博物館評価の構築

調査協力館:北海道大学総合博物館、全国の科学館など

- ◆平成24～26年度
地域社会での役割と関与者の長期記憶の
観点に基づく博物館の新評価に関する研究

調査協力館:名古屋市科学館、明石市立天文科学館

- ◆平成27～30年度
高齢者の長期記憶に基づく異世代間交流の場としての
博物館の基盤研究に関する研究

調査協力館:明石市立天文科学館、昭和日常博物館

- ◆平成31～令和6年度
企業博物館の多様なステークホルダーにおける
博物館体験の長期記憶に関する研究

調査協力館:竹中大工道具館他

博物館の来館者研究をリードする

Falk, J.H.とDierking,L.D.は「学習」について広く捉え、「ミュージアム体験」という視点を提示する。

→博物館体験:

人々の心に博物館に行こうという考えが浮んだ瞬間から、実際に博物館を訪れて、そして何日も何ヶ月も何年も経った後に思い出す時までのトータルな体験

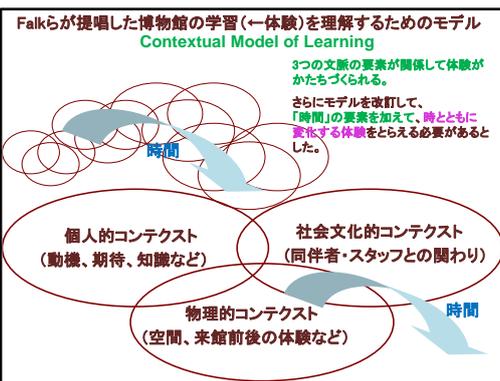
→学習を含めた体験の諸相:

認知的な学習(～を知った・～を理解したなど)、態度や価値、信念の変化(見方が変わった、新たな意義を見いだしたなど)として捉えるだけでなく、感情の側面や社会文化的側面(人との関わりなど)にも注目して捉える。

私たちの研究のベースにあるのは、Falk (J.H) と Dierking (L.D.) というミュージアム研究者の考え方です。これに私もとても共感しています。彼らはミュージアム体験をとっても広く考えていて、人々の心に博物館に行こうという考えが浮かんだ瞬間から実際に博物館を訪れて、何日も何ヶ月も、もしくは何年も経った後に思い出すときまでのトータルな体験として捉えています。博物館に滞在中の経験だけではなくて滞在前後も幅広く捉えてミュージアム体験を見ていこうという考え方です。

そして、体験の内容に関しましても、何かを知った、何かを理解したという認知的な学習だけではなくて、態度や価値、信念の変化、見方が変わった、新たな意義を見出したなども含める。さらに、感情的な側面ですとか、人との関わりなど社会文化的な側面にも注目して捉える必要があるというふうと考えています。

彼らは博物館の学習、博物館の体験を理解するためのモデルとして、Contextual Model of Learning を提唱しています。個人的コンテキスト、動機や期待、既有知識など。それから社会文化的なコンテキスト、同伴者やスタッフとの関わり。そして物理的なコンテキスト、博物館の独特な空間ですとか、来館前後の体験など。これらのコンテキストの要素からミュージアム体験が構成されると捉えるモデルを提示しました。その後、このモデルはリバイスされまして、時間の要素を加えたのですね。ミュージアム体験はだんだん時間を経て変化していくものだ、この視点が必要だとして、長期的に見ていく必要性を主張しました。



■調査方法

来館者に限定せず、博物館に関与するさまざまな人を調査対象とする。

・記憶の要素を分析するための質問紙調査

・調査協力者の「語り」から、博物館体験の全容を描き、記憶の影響力を分析するための面接調査

最も記憶に残っている場面

誰と、いつ、何を

その時の気持ち、思い出している今の気持ち

なぜ最も覚えているのか

繰り返し思い出したか

当時の自身の立場・社会状況

記憶の意味づけ

当該館との現在の関わり・思い、未来の関わりの可能性

・関連資料などの分析を加えた包括的調査

29

■分析方法

* 質問紙調査

記憶特性質問紙の回答の因子分析

* 面接調査

・エピソードを点検し、語りの特徴を抽出

・エピソードを、〈記憶の鮮明さ・感情性・意図性、

課題目標の到達度・リハーサル〉、

〈個人的文脈・社会文化的文脈・物理的文脈〉

の観点から評定(複数の評定者)

博物館学、認知心理学、関連する社会学・経済学分野の観点からの分析

30

では次に、私の研究における調査方法を少しご説明します。来館者に限定せずに博物館に関与するさまざまな人々に調査協力を依頼しています。質問紙調査と面接調査、そして包括的な調査を行っています。質問紙調査は認知心理学の清水先生にほぼお任せしており、記憶の質、記憶のありようを捉えるための因子分析などを行っています。

私が主に担当しているのは語りの質的分析のほうですね。面接調査ではここに示した項目などを聞き取っています。自由に話してください、全く事前の準備はいりません、と申し上げ、皆さん本当に自由に語ってくださいます。最も記憶に残っている場面、誰といつ何をしたか、その当時の気持ち、思い出している今の気持ち、それから、なぜそれを覚えているのでしょうか、繰り返し思い出したのでしょうか、当時のご自身の立場や社会状況、その意味づけはどうか。その館との現在の関わりと、未来の関わりの可能性などを聞き取っています。大体、面接調査は30分を予定していますが、ハッピーなメモリーが多いせいでしょうか、皆さん喜んでたくさんお話して下さって、2時間半くらい話された方もいらっしゃいます。先ほどのお話にもありましたけれども、自分の過去の体験を再構成して、今を意味づけることで自分の過去を整理して、今から、そして未来へとどんな思いを持っているかを考え直すいい機会になったというふうにもお話くださる方が多いです。

それから、質問紙調査と面接調査の他にも、関連資料などの分析を加えた包括的な調査も行っています。

分析方法は、記憶特性質問紙の回答の因子分析を、面接調査はエピソードを点検して語りの特徴を抽出しています。例えば記憶の鮮明さ、感情性、意図性、課題目標の到達度、リハーサルの観点からの分析、そして先ほどご紹介したFalk (J.H) とDierking (L.D.) のモデル、個人的文脈、社会文化的文脈、物理的文脈からどのような要素が強いかということ判断して、それを複数の評定者で評定して意見を一致させるまで議論をしています。評定は主として私と2名の共同者で行っています。

他に、博物館学、認知心理学、関連する社会学や経済学分野の観点からの分析も行っています。

先ほど須賀先生のご発表でもありましたけれども、調査協力者の語りは、いかに真実なのかという辺りは、やはりこの研究ではネックになると思います。面接調査での語りは、う

自由記述を主とした質問紙調査

面接調査での語り

回答・語りの真正性

← トライアンギュレーション

時代背景、プロフィール、検証

主観的現実

過去の経験を現在意味付ける

社会学、文化人類学、心理学

…他分野の知見と調査手法

31

そであってはいけませんので、語りの真正性という視点はとても重要になると思います。これを担保するためにはトライアンギュレーション、多角的な視点・方法を意識して、時代背景ですとかプロフィールなどからも検証しています。

でも一方で、先ほど須賀先生もおっしゃったように、主観的現実という考え方もとても重要です。過去の経験を現在、意味づけている、それはその人にとっての真実なわけですよ。例えば過去のつらい体験も今、思い出せば、意味があるものになったとおっしゃれば、それはその方にとっての、今の主観的な現実である。聞き取った今の時点での意味合いを大切に捉えていきたいと思っています。これには、社会学ですとか文化人類学、心理学、看護学などの他分野の知見も応用して研究の精緻性を高めたいと思っています。

最後に、私の全体の研究のまとめとして、博物館体験の語りの特徴として四つ挙げます。まず一点目として、博物館の転換期に関する語りが多かったです。先ほどご紹介しましたような大きな展示リニューアルですとか、大震災から復興しての再開館についてのお話。

二点目として、社会文化的文脈に関連した意味づけがとても多いです。家族や友人などの同伴者、他の来館者、学芸員との関わりを意味づけて語る方が多かったです。

三点目として、来館していない間も持ち続ける思いというものも見逃せない大事なものだと思います。電車から眺める博物館の建物、あとは街のシンボルとしてのミュージアムというような意味付けもミュージアムの体験の中に大きな要素を占めていると思います。

そして最後に、過去と現在、未来を含めた人生を通して、現在、語る自分自身の物語である。これも重要な要素だと思います。

過去の体験を現在、思い出すことの意味ですとか、過去の体験を思い出して現在、未来に思いをはせて意味づけて語ることの意味、そして語りを共有することの意味も、これからもっと考えていきたいと思っています。インタビュー調査を終えますと、ありがとうございますとおっしゃって帰られる方が多くて、私自身は調査に協力していただいてお礼を申し上げるのですけれども、調査協力した方にとっては自分の思い出を整理し直して語ることで、これを聞いてほしかったとか家族と愛されていた大事な思い出だったということを出せてよかったということをおっしゃってくださる方が多い。そ

* 博物館体験の「語り」の特徴

1) 博物館の転換期に関する語り

全館リニューアル、阪神淡路大震災から復興しての再開館

2) 社会文化的文脈に関連した意味づけの多さ

家族や友人など同伴者、他の来館者、学芸員との関わり

3) 来館しない間も持ち続ける思い

電車から眺める博物館の建物、街のシンボルとしての博物館

4) 未来も含めた人生を通して語る自分自身の物語

過去の体験をもった現在の自身、そして未来にも関わる展望

32

* 過去の体験を現在、思い出すことの意味

* 過去の体験を思い出し、現在・未来に思いを馳せて意味づけて語ることの意味

* 語りを共有する意味

←インタビュー調査を終えて、ありがとうと述べる協力者

人それぞれの多様な体験、多様な意味づけに思いを馳せた上で、ミュージアムの社会における意義・役割とは何か。たとえば、科学館の来館者が皆、科学者になることが、望ましいのか。

33

の辺りは、この私の研究テーマの特色の一つかなと思います。

大学の授業で学生に問いかけるのですが、例えば科学館の来館者がみんな科学者になることが望ましいことでしょうか。もちろん科学者になることも理想的な道の一つかもしれませんが、科学に対して親しみを持つピアニストがいてもいいですし、主婦の方がいてもいいですし、学校の先生がいてもいいですし、そのような素養をつくるのがミュージアムの本来の目的ではないかなと考えております。

総括しますと、ミュージアムで人々が得ているものは、博物館教育とか、自発的な学習という言葉からイメージされるよりもっと多様であり、極めて個人的な意味を持つものであり、そしてそれは時を経て強化されたり変わり得る。そして、さまざまな要素、ミュージアム訪問以外の要素も考慮して考えるべきだと思っております。

最後にこのミュージアム体験を捉える意味を考えてみますと、ミュージアムでの体験を知ると、学習も含めたミュージアム体験の幅広さを明確化することができると思います。そして、よりよい学習環境やミュージアム体験をデザインすることもできるかもしれません。そして、ミュージアムの持つ力ですとか魅力の確認ができる、これによってミュージアムの存在意義を示す一つの指標になるのではないかと考えています。

ただ、これが唯一の指標ではなくて、例えば入館者数ですとか、教育プログラムの実施回数、参加人数、学習効果、これらはとても必要な指標です。ただ、これらだけではミュージアムの社会に果たす役割を十分には示せないと思います。今回のミュージアム体験というような視点を入れることでミュージアムが社会においてどんな力を持っているか、可能性があるかということを考えながら、今後も研究を続けていきたいと思っております。少しお話が長くなりまして申し訳ありません。

以上の研究は、これらの科学研究費の助成を受けて実施してまいりました。今後も、今回お付き合いが始まりました須賀先生、汐崎先生のご研究もぜひ参考にさせていただきながら、図書館に関わる皆さまからのご意見も伺いながら研究を進めていきたいと思っております。ご清聴ありがとうございました。

■ミュージアムで人びとが得ているもの・ことは、「博物館教育」「自発的な学習」という言葉から一般にイメージされるより、多様であり、そして極めて個人的な意味をもつ。

■さらにその意味づけは、時を経て強化されたり、変わり得る。ミュージアムが人々に及ぼす力・影響力は、長いスパンで見る必要もある。語った時点でその人自身がその影響力を意識したことには注目した上で、自身の素養や家庭環境、それ以外のさまざまな刺激などミュージアム訪問以外の要因も考慮すべきである。

34

3. ミュージアム体験を捉える意味

ミュージアムでの「体験」を知る

- ・学習も含めたミュージアム体験の幅広さの明確化
- ・よりよい学習環境・ミュージアム体験のデザイン
- ・ミュージアムの持つ力、魅力の確認

入館者数や、教育プログラムの実施回数・参加人数、学習効果は博物館評価に必要な指標ではあるが、これらだけでは博物館が社会に果たす役割を十分に示せない

ミュージアムの存在意義を示す一つの指標になるのではないか

付 記

本研究は、以下の日本学術振興会・科学研究費補助金による補助を受けたものである。

平成21～23年度 基盤研究(C)課題番号21601002
平成24～26年度 基盤研究(C)課題番号24501267
平成27～30年度 基盤研究(C)課題番号15K01145
平成31～令和6年度 基盤研究(C)課題番号19K01137

いずれも研究代表者：湯浅万紀子

参考資料・注

- 1) Falk, J.H. and Dierking, L.D. Learning from Museums: Visitor Experiences and the Making of Meaning, ALTAMIRA PRESS, 2000.
- 2) 湯浅万紀子編著『ミュージアム・コミュニケーションと教育活動』樹村房, 2018.
- 3) 湯浅万紀子・清水寛之・藤田良治「科学館の関与者の長期記憶に関する調査研究～名古屋市科学館での面接調査を中心に～」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』No.22, pp.47-54.
- 4) 湯浅万紀子・清水寛之・藤田良治「博物館体験の長期記憶を探る～博物館学と心理学の観点による関与者の語りの分析～」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』No.25, pp.31-38.

第2部：パネルディスカッション

「心に残る体験を研究する意義・方法・成果」

パネリスト：須賀千絵，汐崎順子，湯浅万紀子

須賀：

まず皆さんからいただいた質問で、「博物館と図書館の話で共通点が多いと感じたけれども、相違点もありますか」というものがありました。このことについては、私たちも、それぞれ図書館と博物館の話を詳しく聞くのは初めてのことなので、感想や感じたことを一言ずつ、お話していきたいと思います。では、汐崎さん。

汐崎：

私は今までは図書館の世界だけで考えていたんですけど、図書館で本を読むこととか、読書をするのが、すぐに読解力と結びつけられしまうのがちょっと嫌だな、ということが、いつも心の中にあっただけです。それだけでなく、楽しみのための読書とか、心に残る読書というものがどうものかなのかを知りたいな、ということからこの研究を始めたということもあるんです。シームレスに一人一人の人生の中で、その人にとって読書がどういう意味があるのかというのが、今回インタビューをとおして分かってきたところです。それは湯浅先生のご発表をお伺いしても、すごく共通点があるというか、少し自分自身のビジョンも開けたな、と思っています。

先ほど湯浅先生からお話があったんですけど、図書館の利用とか、読書に対する人の意識、それから博物館…ミュージアムですね、ミュージアムを使うことに関してはもともとの敷居の高さが違うのかなって感じました。日本って今すごく美術館の入館料が高かったりしますよね、特にコロナを経て。そうすると、やはりそこに行くのには、図書館を使うのとはまたちょっと違う敷居の高さがある。あと、家族で行きましょうとか、みんなで美術館に行きましょうとか、動物園に行きましょうというように、行動の仕方がちょっと違うのかなと感じます。図書館とミュージアム、それぞれの入り口があるかなと感じた次第です。

須賀：

湯浅先生、お願いします。

湯浅：

ご質問ありがとうございました。分析の枠組みですとか、注目した視点というのはとても共通していると思いました。一方で今、汐崎先生がおっしゃいましたように、図書館とミュージアムでは敷居の高さがかなり違うと思います。私の授業で学生たちが提出したミュージアム体験のレポートを共有しますと、自分の住んでいた地域にはミュージアムがなかったと、大都会に住んでいればこんなにミュージアムがあったから、自分は

なんて経験が少なくて残念な子ども時代だったんだろう、と発言をする方もいるのですが、でもまた体験をこれから作っていけばいいわけで、これから皆さんも、大人になっていろいろな場に行けばミュージアムとたくさん出会えますよ、という話はすることはあります。あと、やはりミュージアムは各地域にあるわけではないので、近くであればいいですけども、大人に連れて行ってもらう、近くにそういうものがあるということと、連れて行ってくれる大人がいるということも大きな違いだと思います。

そして私の調査対象は、調査を呼びかけて応じてくださる方がほとんどですので、調査協力者はミュージアムに関心のある方がとても多いのですね。そういう意味ではかなりバイアスがかかっているということは意識しています。一方で非来館者への調査をまた別の枠組みで実施したことがありまして、ミュージアムに行ったことがない人を探すのも意外に大変なのですけれども、その方に話を聞くと、ではこういうことがあったら行きますか、全然、そんなことでは行かないという方が結構いるので、自分の周りにいるミュージアム好きな人だけではない方々への調査というものも、視野に入れる必要があるかなと思っています。

須賀：

私も、湯浅先生と非常に同じような感想を持ちまして、博物館はスペシャルな体験であるということをととても感じました。図書館は1週間に1回行ったりするところ、また読書も日常的な行為なので、どこまでを体験として切り取るかがちょっと難しいのですが、博物館では、「行くぞ」というスペシャル感がある。博物館の体験の場合は、「行くぞ」と決めてからの記憶をいろいろ思い起こしていらっしゃる。また湯浅先生が今なさっているご研究はかなり評価を見据えたもので、図書館の研究などでも、そういったこと（評価）をしていかななくてはいけないと思いました。アウトプットからアウトカムへとは、図書館の評価でも言われていますが、博物館は、一步、先に進んでいるという印象を持ちました。

今のところ、私どもの研究は評価にどう応用するかということまではいっていませんが、実際に評価に応用することも、これから考えていかななくてはいけない。評価への応用については、別の人に手渡して進めていくのかもしれませんが、そちらの方向にもつなげていきたいと思いました。この研究がどういう応用の可能性を持っているか、この研究を、どうすれば図書館の読書振興に役立てられるかというようなご質問も、皆さんからいただきました。

研究の展望、あるいは学術研究で終わらせるのではなくて、社会にどうやって反映させていくかということについての意見、何かヒントになるようなことなどについて、ここでお話できたらと思います。汐崎さんはいかがでしょう。

汐崎：

研究の展望ですか。私は図書館員として児童サービスをずっとやってきました。そし

て、目の前にいる子どもに本を手渡して、その子たちが「ああ面白かった」とか、後から「あの本、面白かったよ」って言ってくれる、その毎日の生活に非常に満足を感じていたんです。でも、図書館の現場を離れると、そういう子どもの姿がない。でも学生に、あなたの図書館利用はどうですか、子ども時代の読書はどうですか、とレポートの課題として尋ねると、生き生きと語ってくれる。実は、もともこの研究の根っこは、学生に書いてもらった沢山のレポートにあるんです。つまり図書館員だった時の私は、目の前にいた子どもにしか見ていなかったけれど、長い目で見たときに、例えば種をまいて花が咲く…ときには枯れることもあるんでしょうけれど、そこまで見ての「読書」だなんて思ったんですね。

これは私の個人的な考えかもしれないんですけど、やはり今の、即時的な成果…「今、何冊読んだ」とか、そういう見方が割と多いなと思います。「読書」っていうものを子ども時代に切り離さずに人生全体で考えること、読書を子どものものだけとは考えずに、1人の人生の中でのものとして考える、振り返って考えることが必要だと思うんです。

今、図書館などで活動している人にも、そういう先の視野が開けてくるようなもの、今の、ここだけの経験だけではなくて、すごく長いライフスパンで「読書」を見ることとか、そこから、大人も子どもも一緒に図書館のことを考えようと。そして、大人が図書館を好きであれば子どもも図書館に行ってくれる、読書の大事さを分かってくれると思うんです。そういうことを何か示す、というのはすごくおこがましいんですけど、成果として見せられるといいなと思ったりします。

すみません、答えになっているかどうか分からないんですけど。

湯浅：

展望といたしましては、ご質問の中に、図書館では日常業務としてインタビューしたりということは難しい、というご意見があります。確かにそのとおりだと思います。一方で今 SNS が盛んに行われているので、調査です、とかしこまっていなくても、気軽に自分の体験を語ったり共有したりすることができるようになってきているので、その辺を利用されると、この図書館でこんなことがあったとか、こんな本を見つけたとか、ミュージアムもそうですけれども、そういうことが共有されていくと幅が広がるのかなというふうに思います。

別のご質問で、体験をデザインすることについて、ということがありましたけれども、体験をデザインすることをスライドで紹介いたしましたけれども、実は体験をデザインするって本当、正直、怖いなと思っていて、体験はこちらからデザインするのではなくて、やっぱりご自分でつくっていくべきものだと思いますので、例えば SNS とか研究発表を通して皆さんの体験を共有することで、ご自分の経験以外の、思い描いていたもの以外の場があるとか可能性があるということを知っていただくことが、いずれ、その方が体験をデザインしていく時の一つの何か道筋になればいいかなというふうに思ってお

ります。以上です。

須賀：

私どもの研究の傾向や意味づけは、今の時点できちんと語れるわけではないのですが、例えば、長期的な効果の研究では、研究している対象は昔のことであり、10年前、20年前（のできごと）を、「あれはよかったね」って今、分かってどうする、ということはあると思います。でも過去を意味づけているのは、今ですよ。過去を意味づけることが今できるということ、過去を研究しているけれど、それが今についての研究になることが何かヒントになるのではないかと思います。先ほど湯浅先生のお話の中でも、過去を意味づけることをミュージアムで考えていらっしゃると聞いて、すごく力を得たんです。昔の話を聞いているんだけど、昔の話を話している今のあなたのことを、私たちは見ているということのをうまく織り込めば、今の社会に役に立つものになるのではないかと思います。

つまり自分を肯定する、将来に希望を得るといったことに役立っていると言えるのではないかと思います。即効性のある効果については、例えば本を何冊、読んだとか、字がたくさん読めるようになったということから分かると思います。自己肯定感なども、テストで測る方法がありますが、もう少し長いスパンでやる意味があるのではないかと思います。

実際の研究の方法などについて、いろいろご質問がありました。それぞれ汐崎先生、湯浅先生、それから私と、特に印象に残ったポイントなどを中心に、今までのお話の補足なども含めながら一言、二言ずつお願いします。

汐崎：

ある程度、予想もしていたんですけど、予想外のものも結構出てきました。たくさんの方に本当にご協力いただき、すごく感謝したいと思います。

私には各時代の社会的な状況と関わって変化したエピソードもあるのか、という質問がありました。私は変化というよりも、共通点が結構あるなって感じたんです。例えば『せいめいのれきし』についてのスライドがありましたけれど、実は、1人が話されたのではなくて、何人もの方がこの『せいめいのれきし』の本の話をされたんですね。私自身は『せいめいのれきし』はちょっと苦手で読み込めなかったんですけど、人生にすごく関わりがあった、という発言があって、そんなにこの本を読み込んでたんだな、結構、世代を共有して読んでるんだなって思いました。もちろんちょっと世代の上の方が話されることが多かったんですけど、実はこの2月に某中学校で中学3年生に話をしに行く機会があって、その中に『せいめいのれきし』が好きで、その改訂版を出された真鍋先生の話聞いて、恐竜とか博物館の世界に行きたいんだっていう生徒がいた。

ちょっとかっこいい言い方かもしれないんですけど、本の力っていうのはすごいなっていうことを感じました。もちろん今の世代の子たちの新しいメディアとの付き合いと

か、読み方は変わってるなって思うので、変わるところと変わらないところはあるんですけど、私としてはその変わらないところが結構あったんだなっていうことがすごく印象に残りました。

須賀：

湯浅先生は非常に多様な年齢層の方にお話を聞いていらっしゃいますが、世代間の共通点や違いについてお感じになられますか。

湯浅：

70代、80代の方ですと、科学館に行くっていうこと自体が特別であったりというような違いと、日常的に科学館に行って工作、実験をするような子どもたちとは差があることはありましたけれども、あまり、それほど大きな違いはなかったように思います。

須賀：

私どもも、最初は、時代によってかなり子どもの本の出版状況も違うし、学校図書館の整備状況も違うし、社会状況が違う中で（異なる世代の体験を）一緒にまとめるのはちょっと乱暴ではないかと思うところがありました。それで世代別にお話を聞くことにしました。確かに学校の図書館の状況は世代によって違います。例えば20代の人に聞くと、朝読書があったとか、学校図書館の充実度はともかく、そこにちゃんと人がいて、ある程度学校図書館を使った、という話がたくさん出てきます。そういったところはかなり違うと思いますが、好きな本のタイトル、家族とどういふふうに関わったかという話は、とても共通するところが多かった。それにはかなり驚きました。

私は、本の読み方には、（異なる世代間で）とても共通点が多いような気がしました。ただ、今、インタビューでお話を聞いているのは（最も若い人でも）20代止まりなので、その人の子ども時代は10年前くらいですよ。もしかしたらスマートフォンを持っているのがみな当たり前、小学校のときから持っているという世代になると、またちょっと変わってくるのかなという気がします。ただ読書については、非常に世代を超えて共通点が多いと思いました。本好きな人との共通点なのか、それとも本を介してのコミュニケーションや、読書という行為の特殊さなのかは、まだ分かりません。

それでは湯浅先生、印象に残った質問などについてお答えいただけますか。

湯浅：

ありがとうございます。ミュージアムの力を、可能性を広げて皆さんに知っていただきたい、博物館評価につなげたいという思いで研究しているのですが、一方で、ミュージアムだけがこういうことをしているわけではなくて、その方にとってその体験で語っていただいたことには、その方のさまざまなプロフィールですとかバックグラウンドそして社会状況があつてこそなので、ミュージアムだけがこれをした一つの大きな

要因です、ではないかもしれませんが、いろいろな要素も考えながら冷静に分析しなければいけないということはいつも心に留めております。

では、少しいくつかのご質問に答えたいと思います。「ミュージアム体験の語りの中に、ミュージアムのオンライン上のコンテンツに関わるものはありましたでしょうか」というご質問ですけれど、私が今ご紹介しました調査はコロナ禍前のことなので、まだオンラインミュージアムですとか、そういうことがあまり盛んではなかったのも、オンラインに関する何かっていうのはあまりありませんでした。一方で映像展示はすごく強烈に印象に残ることがあり、この映像ですとか、プラネタリウムのあの映像という語りは多かったです。

一方で、今度コロナ禍になってからは、「おうちミュージアム」という取り組みがあって、おうちでいろいろな展示を体験できるような仕掛けができましたので、もしかしたら今後インタビューする方々の中には、そういうお話が出てくるかもしれないと思います。

それからもう一つ、「研究対象者を今後、広げていく予定はありますか」というご質問です。例えばミュージアムとの関わりが少なめという方などということでは、先ほど申しましたような非来館者、それはもうミュージアム体験にはならないかもしれませんが、私の調査でもミュージアムとあまり関わりがない学生たちや高齢者の方にもお話を伺っていますので、そういう方々にも少しお話を伺っていくと意外な展開があるかもしれないと思っています。

私の共同研究者の清水先生と David 先生は万博の研究もされているのですよね。大阪万博…50年前ですか、大坂万博と愛知万博と、もしかしたら今度の大阪万博の話も出てくると思うので、そういう辺りも、とても関連が近い分野なので、注目していきたいと思っています。

次に「日常や普段の生活の中でミュージアム体験を思い出すきっかけなどを調査された先行研究はありますか」というご質問ですけれども、私が知っている限りは、来館動機を聞く調査はあっても、体験を中心に据えてそれを思い出すきっかけだけを調査した研究というのは見たことはありません。一方で私の調査のように、調査項目の中にきっかけを聞くような研究の視点はありますので、いろいろな調査報告の中に関連したものがちりばめられているかもしれません。

あとは「エピソードで具体的なものがあればお聞きしたいです」というご質問ですが、きょうも少し紹介いたしましたけれども、私が簡単にまとめました論文などでも少し、いくつかの調査事例をご報告しておりますので、よろしければそちらもご覧いただければと思います。

須賀：

ありがとうございました。今回湯浅先生にご紹介いただいたエピソードの中で、私の印象に残っているのは、「来館しない間も、いつも心のどこかにあった」というもので

す。その「行かないけど（ミュージアムが）あること」の意味。私はぬいぐるみお泊まり会の研究をしたことがありました。ぬいぐるみお泊まり会をご存じのない方もいらっしゃるかもしれないので、ちょっと説明すると、図書館で子どものぬいぐるみを預かって、そのぬいぐるみは図書館に泊まることにする。そして泊まっている間、ぬいぐるみが図書館の中でこんなことをしましたという写真を図書館員が撮って、翌朝子どもに渡す。「こんな感じで図書館を探検しましたよ」と言って。それでぬいぐるみが「一緒に読んでもらいたい」と言っていた本を（子どもに）貸すというイベントです。

その研究をしたときに、これは図書館の方から聞いたお話ですが、ぬいぐるみを預けている夜に、子どもが「うちのぬいぐるみ、どうしてるかしら」と、夕ご飯のときに言ったそうです。するとお父さんが「多分コンピューターの操作をしてるんじゃない？」と話した。それで次の日その子が図書館に行ったら、そのぬいぐるみがコンピューターを操作している写真があって、「やっぱり」と言ったということがあった。家で図書館のことが話題になって、とてもいい時間をすごしたという話を聞きました。それを思い起こしました。

図書館に行く、博物館に行く、本を読むということは、そこに本があるとか、そこに博物館があることの安心や意義につながる（体験になる）。それがもしかしたら将来の利用につながることもあるかもしれない。使っていなかったとしても、そこにあるという事実を、図書館がある、博物館があることの意義として上手に社会に戻していけたらと思いました。

博物館の語りの中では、そういったことをちゃんと拾いだしているのだから、図書館も、そこに図書館があるということの意味がある、本が読めること自体に意味があるということやうまく拾いだしていければと思います。直接は使わない、今は使っていないけど、そこにあることの安心感というのは、さらにもう一つ、（実際の読書や利用の）体験の先にあるような気がしました。

お話を聞く中で、いろいろな刺激を受けたのですが、これまで私は、研究の形にまとめることがとても難しいと何度も感じました。話を聞くことは、とても楽しいのですが、中立的に話を聞くということが難しい。特に、この研究では、知っている人から話を聞いたので、私たちがついつい介入し過ぎてしまうところが少しあったかもしれないという反省があります。うまく話を引き出していくということと、無味乾燥に話をするのは、違うと（その時は）思っていたのですが。

またグループインタビューをしていた時は、複数のインタビュー協力者が一緒に話している中で、話の中の何かをきっかけに（別のことを）思い起こすということに意味があると感じました。単独インタビューと違ってグループインタビューでは、他の人が話しているときに、そこにいる誰かが「なるほど、うまいことを言うな」と考えているわけです。それで自分の話す番が回ってきたときに、「さっきの話で思い出したんですけど」という発言が出てきたりする。

インタビューの方法として、ロボットが聞くように全く介入しないで聞くというもの

違うように思いますが、介入し過ぎて方向づけてしまうというのも違うと思います。インタビューの方法が、とても難しいということをあらためて感じました。

汐崎：

湯浅先生は、グループでのインタビューではなくて単独ですね。

湯浅：

はい。私はインタビューは単独でする場合が多いのですが、お母さまとお子様に一緒に伺ったこともありますし、私が大学院生時代にはグループインタビューをしたこともありました。「科学の祭典」という実験イベントですごくいい実践をしている奈良県の中高生グループがあって、学校に伺ってお話を、中学生、高校生に聞いたのです。中学生とか高校生って微妙な年代で、恥ずかしくて自分のことを友達の前で語らないこともあるのですよね。でも、ある1人の女子中学生が高校生に交じって話をしたとき、自分はすごく教師になりたい、とか自分の展望を熱く語ったのですね。普段、言えないことをその場で話せて、それを周りの高校生が、「すごいね」って感動を持って聞いてくれたので、普段、話せないことを話せたという喜びをインタビュー後に語ってくれたこともありました。

一方で私の調査でも、先生方と一緒にかもしれませんが、半構造化インタビューという形式で行っておりまして、具体的な質問項目をあらかじめ、こちらでは用意しておきます。お話の流れを遮らないように最終的には全ての項目を聞き取り、その方がお話しなさいたいことは、どんどん話していただくというふうにはしております。

須賀：

お話を聞くときに、質問項目を（事前に）決めておくということは、私どももやっていますが、どういうふうに話を聞き出すなど、何かこつのようなものはありますか。

湯浅：

本当にハッピーな記憶が多いので、皆さん、こちらが聞きたいことを先に語ってくださることも多くて助けられている部分もあるのですけれども。やはり介入しないように、ということに重きをおきながら、うなずいたりとかはしながら、お話を聞いていますし、ときには「私もそれ、同じようなことを経験したことがあります」というようなことを言ったりしたことはありますね。

汐崎：

私がインタビューで結構、介入してしまうんです。相手が自分の読書経験と同じ本を読んでいると、つい嬉しくなって、「そうそう」みたいな感じになってしまって。本当に面白くて、いろいろなお話が聞き出せてよかったな、とは思うんですけれど。

先生にもお伺いしたいんですけど、研究としてきちんと皆さんに認めてもらえるようなというか、研究的な価値もきちんと一つ示さなければいけない。それが質的な研究ではすごく難しいですよ。私たちは聞いたものを「テキスト」、「コンテキスト」、「読者」という要素で分けて分析したりもしたんです。でもまとめていく過程では、「これが一般化」っていうものではない。読書の体験は一般化できるものではないんです。でも一つのパターンとして、研究成果として示すときに、皆さんに研究成果として一つの塊があるよね、って分かっていただけのような結果にする苦労がずっとあります。

私みたいにどうしても主観的に、「自分は本が好き」という方向に気持ちが入ってしまうと、「それは汐崎さんの考え方じゃない？」とか、「子どもの本が大事だと思っている人の考え方じゃない？」とか言われてしまう。「このインタビューだって、結局本が好きな人にやってるだけじゃない？」ってなっちゃうんです。でも、そういう方々に聞くこと自体が、もともと意味があると思っています。湯浅先生はさきほどハッピーな経験、って仰いましたけど、私たちもやっぱりハッピーな経験が多い方にお話を聞いているんです。湯浅先生はその辺りの位置づけとか、客観性をどれだけ持たせて研究として説得力を持たせているのか…という難しい質問なんですけれど、いかがですか。

湯浅：

ありがとうございます。私の場合、今日は質的な研究を中心にご報告いたしましたけれども、共同研究なので、量的な研究は認知心理学の清水先生が行ってくださっているのです。それを両輪として、なおかつ包括的な調査をするということで、多角的な研究分析をするという姿勢を貫いております。ただ David 先生と清水先生は記憶のありようが知りたい、私は博物館体験の多様性を示して、ミュージアムの評価の一つの指標になり得るかを検証したい、というように視点の違いはあるのですけれども、それぞれの視点の特性を生かしながら、共同研究として進めていくところに重きをおいています。

須賀：

それは確かに、私どもの研究で足りなかったところです。視点が違う人やアプローチが違う人をうまく組み合わせるといえるのは、非常に大事なやり方だと思います。

あと、「博物館に行くことや、図書館に行くということが『いいこと』だ」という前提で研究を進めていらっしゃるんですか」という質問がありました。博物館に行く、図書館に行く、本を読むといったことは、確かに「いいこと」だと思っています。でもそれは「唯一のいいこと」ではなくて、「いいこと」の一つだと思っています。「いいこと」は、スポーツでもいい。音楽を聴くのもいい。博物館でもいい。それぞれが「いいこと」の中の一つになり得るけれど、全てではない。図書館に行くこと、本を読むことだけがいいことの全部ではないと思っています。

そしてそのことを見失わないようにしたいと思っています。図書館だけのためになる研究ではなくて、社会（全体）のためになるというか、博物館もスポーツも、どれも

「いいこと」の一つであるというスタンスで（研究を）進めていきたいと思っています。博物館も図書館と同じように、よく「箱もの行政」と言われたりしますよね。いろいろな価値観がある中で博物館や図書館のアウトカムを大切にしたい。そういった博物館の位置づけを、どういうふうに研究の中に反映されていच्छゃいますか。

湯浅：

ありがとうございます。博物館の特性、リソースの特徴は何でしょう、ということをお考えた場合に、当たり前のことですけれども、例えば単発のイベントですとか学校教育と比較すると、それは際立ってくると思います。例えば、先ほど先生がおっしゃってましたように、常設機関として常にそこにあるということは、とても重要なことだと思うのですね。そこに行けば学校の先生とは異なる、専門知識を持った学芸員のかたがたやスタッフがいる、学校の友達とは違う、もしかしたら別の仲間がいる、あとは特別な空間があるとか、成績で評価されない、いろいろな取り組みがあるということも大きな特色になると思います。

先生もおっしゃったようにミュージアムが全てではなくて、ミュージアムがあるということになるべく多くの方に知っていただきたいと思っています。休日に出掛ける場所の選択肢の一つになればいいなと思いながら研究を続けています。先ほど発表でも申しましたけれども、科学館に行った人が全て科学者になることが理想ではないという辺りも意識しながら、まずはミュージアムが選択肢の一つとして余暇の一つ、もしくは自分の可能性を広げる場の一つとして認識してくださる方が増えればいいなという思いが、いつも根底にはございます。

須賀：

汐崎先生、どうでしょうか。

汐崎：

おそらく今日は読書離れとか、子どもの読書について危惧されたりとか、そういうことを、いろいろ考えている方が多くご出席されたんだと思うんですけど、須賀先生の発言のように、私も、楽しいことの中の一つが読書であったり図書館利用であったり博物館であったりしてほしい。人生って、一つのものでできてるわけではないので、たくさんさんの良いことで、その人の人生がつくられると思うんですね。私は本当に申し訳ないんですけど、子どもの時には、ほとんど博物館とかには行ける環境でなかったんです。ですから、逆にそういう話、インタビューをした方の話などを聞くと、「いいな、そういう体験ができて」と、うらやむ気持ちがある。生活の中でそういう文化的な要素がいろいろあるのがいいなと。

もう一つ言えば、例えば図書館が単体ではなく、博物館も単体ではなく、例えばコロナ禍の頃にリアルなアクセスができないときに、「おうちミュージアム」でしたっけ…

オンラインで、博物館だけではなくて、いろいろな機関とリンクして、つながって人々に情報を提供しましょう、というのがありましたよね。それぞれの文化的な働きかけが横につながって広がっていける仕組みがあって、その中で図書館や読書がもっと少し豊かに広がっていくのが、理想的と思うんです、本当に。

さっき話した中学生に、「1カ月に1冊も読んでないのを不読率って言うんですよ、あなたたちはどのくらい本を読んでいますか?」と聞いてみたんです。すると、やっぱり2人に1人ぐらいは読んでない子がいるみたいな感じでした。その時、「私は読む子ばかり見ってたんだな」と思ったんです。でも彼らに読書について聞くと、「この本を読んだ」、「あの本を読んだ」って結構話してくれるんです。「ああ、読書の経験っていうのはそれぞれにあるんだな」と思いながら、彼らと話をしていました。

須賀：

ありがとうございました。今までの私たちの研究は、(読書体験が)どんなに心に残るものだったかということで、情緒的な話が多かったのですが、一方、文章を読めるという国語力も、やはり大事だと思っています。本を通して文章が読めるというスキルが身につくことも大事だと。ただ、それかこれか、の二者択一ではなくて、両方が大事だと思います。だからどちらかに偏ってしまうことはとても危ないと思っています。

公共図書館での子どもの読書への取り組みは、どちらかと言うと「豊かな心を育む」という感じでずっとやってきた。薬の説明書を間違いなく読めるといったことは、公共図書館であまり重要だと言われてこなかった。それは公共図書館でやることではないと、何となく思われてきましたが、そちらのほうへの取り組みも、公共図書館でもっとやったほうがよいと思います。

湯浅先生は科学館という理系の人が多い場で研究なさっていて、科学の素養を身につけることが、博物館の一つの目標とおっしゃっていました。そういった科学的な経験や知識を身につけるということも、ミュージアムと図書館が一緒になってもっとやったほうがいいんじゃないかなと思っていることの一つです。

実際に『せいめいのれきし』や加古里子の『海』¹⁾といった科学の本から、非常に大きなインパクトを受けたという話を、インタビューで繰り返し聞きました。そのような話をされたのはみな男性でした。男性と女性で読む本、手に取る本が知らず知らず違っていたということですが、それは生まれつきというよりも環境が影響していて、私たち図書館員が子どもたちに手渡してきた本が、もしかしたら男女で違っていたのかなという気もしています。性差や環境差を超えて、理系の知識に、もっと親しむような経験も、図書館の中でうまく取り入れていったほうがいいのではないかと、湯浅先生の科学館でのご研究のお話を聞いて思いました。

汐崎さんはその辺はいかがでしょうか。図書館で子どもの読書に取り組むとき、幅の広さがもっとあるのではないかと、こういったことが足りないのではないかとこの点はどうでしょうか。

汐崎：

私、実は自分の考えが結構、偏ってたな、ってインタビューして思ったんですね。もともと文学系の人間で、楽しむ読書、心を動かす読書イコール文学というイメージがすごくありました。でもインタビューをすると、実はそこに感動するのではなくて、そこを覚えているのではなくて、さっきの『せいめいのれきし』ですとか『冒険図鑑』ですとか、加古里子さんの本ですとか、それがすごく心に刻まれていて、大人になって思い出したとき、今の「自分」の中に、ある一定の位置づけがあることがわかった。そういう読書を、私自身の気質かもしれないけど、してなかったなって思った。そのときに、自分の思い込みで、物語を読めば、楽しい物語を読めば、そういう取り組みをすれば、私は子どもたちにいい児童サービスをしてるんだ、って思ってたところがあったなって。もちろん知識の本の楽しさとかというのもあるとは思っていたんですけど、その辺りに対する認識が少し欠けていた。何を読むか、どう読むか、何を感じるかって、それぞれの人の自由なので、提供するほうがあんまり偏っちゃいけないな、っていうことをすごく感じました。

すみません、ちょっと余計な話なんですけど、先日はその中学生に「読書ってなに？」ってことも聞いたんですね。そして、そのことについて生徒に書いてもらったり、発言してもらいました。すると、「知識を得られること」、「学びがあるのが読書」っていう子もいました。でも一方で、「そこに書かれてることで感動することが読書」であるとか、あとすごいなと思ったのは、「誰かが自分の思いを書いて文章にしたものを読み取ることが読書」って発言もありました。もちろん講師先生の質問だし、学校図書館っていう場にいる、という子どもの意識もあって学びとか知識っていうものが確かに多かったんですけど、読書の捉え方はさまざまなんだなと。それをちゃんと自分で認識しつつ読書の世界とか図書館の役割っていうものは考えていかなきゃいけないな、と思った次第です。

須賀：

湯浅先生は、ミュージアムにおける研究のこれからの広がり、あるいは少し足りないと思われる点などは、いかがでしょうか。

湯浅：

私自身の研究としましては分析方法の精緻化ですとか真正性を高めるっていう辺りは、やはりまだまだ課題だと思っておりまして、例えば学会発表では長い時間お話しすることもできますけれども、学会誌に投稿する時ってかなり紙の枚数が限られているので、質的な分析結果を長々と説明することが、なかなかできないのですね。その辺りのもどかしさを感じながらも、でもいろいろな研究助成もいただいておりますし、いろいろなかたがたから評価をいただきながら、こういう研究も重要であると認識されつつあるところは力にしながら取り組んでいきたいと思っております。

須賀：

本当に今のお話に共感しますが、やはり研究を成果としてまとめるにあたって、話が長くなるのが難しいところです。短くまとめてしまうととても分かりやすいのですが、何か、そぎ落とされてるものがあるような気がします。それが何かは一言で言えませんが。「…という感じの話でした」としてしまうと、分かりやすいけど抜け落ちるものがある。でもその人のたどたどしいお話を、そのまま読むと感じ取れるものがあるということが、インタビューでありました。それをうまく、論文や発表といった学術研究の形式にコンバートするのはとても難しいことだと考えています。でも実際に、今日のミュージアム体験に取り組まれている湯浅先生もずっとやっていらっしゃるということですし、もう少し違う分野（の研究）から、うまいまとめ方、どういうふうにその研究を人に分かってもらうように進めていくのかという分析の仕方などを学んでいきたいと思いました。学んでいきたいといっても、成果物である論文や発表よりも、そこに至るまでどうやっているのかということをもっと知りたいのですけれども。

湯浅先生が共同研究という形でこのプロセスを共有されているというところは、今まで私たちがやっていなかったところだと思いました。出来上がった論文や発表はそれぞれとても完成度が高いので、その完成度にいくまでにどうすればいいのか、ということを知りたいといつも感じています。汐崎先生はどうでしょうか。

汐崎：

材料はあるけど、どうまとめていくか、というのがやはり難しいところです。精緻化の話もありましたけれど、私は、その精緻化にいくどころか、プロセスをどうしようかというところで、すごく難しいなと感じています。実はこの研究は最初の計画と随分ずれてしまって、インタビューも本当はちょっと違う形だったんです。でもこういう機会を得て、いろんな方のお話も聞けた。実は須賀先生が最初に言いましたけれど、研究の分析はまだ全て終わっていないんですね。世代間の違いについては、先ほどは共通のものが多いって話をしたんですけど、でも実はちょっと違うなって思っていることもある。それは自分の人生を振り返る期間が長いほど、自分にとっての読書がなにか、という説明が長くなっているんですね。もちろん、そういう職業に就かれています方が多いからということもあるんですけど。そうするとこれから先、まだ分析をしていないのは年齢が高い方なので、その人たちの語りの分析から何が見えてくるのかというのは、すごく面白いことです。

須賀先生は「やらない」と言っているんですけど、できれば、今子どもである、2000年以降に生まれた人たち、今10代、一桁の世代の子の読書についても知りたい。特に電子書籍が今はすごく進んできて、読書のあり方も変わってきていると思うんですね。若い子たちは割と使い分けているなっていうことが…、例えばマンガは電子で。と読み分けているところがあるので、将来的には、そういう人たちが人生を振り返ったときに、自分の読書はどうだったんだろうっていうのを、できるかどうか分からないんで

すけど、いつか見られるといいかなと思った次第です。

須賀：

最後に一言ずつお願いします。

湯浅：

今回、初めて図書館の読書体験という視点をいただきまして、本当に勉強になりました。これからご一緒に何かできればという思いも新たにしましたし、きょうお集まりいただいた皆さまからも、いろいろなご質問いただきまして本当にありがとうございました。自分の研究を楽しく続けていく力をいただいたと思います。ありがとうございました。

汐崎：

本当に、いろんな視点をいただけて、博物館と図書館が結構似てるな、とか考えるヒントがあったなと思いました。もしかしたら博物館以外のところにもいっぱい、そういうものがあるかもしれないんですけど。一つところに自分の視点を定めずに、幅広くいろいろ見ていけるような機会があるといいなと思いますし、先生とのご縁がぜひ、つながっていければうれしいなと思います。どうもありがとうございました。

須賀：

皆さん、長い時間にわたりお付き合いいただき、ありがとうございました。質問やコメントも大変、力になりました。また、今日来てくださった湯浅先生にも、大変、感謝しております。ぜひ、これからミュージアムの体験とも、何か共通の視点や意識を持って研究を進めていけたらと思っています。また教育など、またもう少し違う分野との共通性も考えながら、研究の妥当性を考えていきたいと思っています。

ちょうど時間になりましたので、これで今回の報告会を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

湯浅：

ありがとうございました。

汐崎：

ありがとうございました。

注・引用文献

1)加古里子文・絵『海』福音館書店, 1969, 40p.